Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-10-01

第1章 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

前田, 結城 ; 内田, 一徳 ; 増本, 浩子 ; 奥村, 弘 ; 槻橋, 修 ; 井上, 勝盛 ; 小原, 康彦 ; 川口, 利和 ; 木村, 修二 ; 坂江, 渉 ; 岸本, 道昭 ; 清野,…

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,14(平成27年度事業報告書):1-32

(Issue Date)
2016-03-22

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009349

第1章
地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第14回　歴史文化をめぐる地域連携協議会
地域で歴史を学びあうことのおもしろさ

第14回歴史文化をめぐる地域連携協議会が、「地域で歴史を学びあうことのおもしろさ」というテーマで、1月31日（日）、瀧川記念学術交流会館で開催された。当日の参加者は115名55機関にのぼり、例年にない盛会となった。また、当日の様子は2016年2月1日付の『神戸新聞』にも掲載された。

人文学研究科主催の本協議会は、同研究科地域連携センターの1年間の活動を総括する目的で開かれている。今年は、14年間にわたるセンターの活動を振り返り、その活動の継続性の根拠である「おもしろさ」の中身について、民・官・学それぞれから報告者を出し、議論をおこなった。

討論は1時間半にわたって活発におこなわれた。報告と討論を聞いた参加者からは、「歴史を地域で学びあうことの楽しさを正面からとりあげたのはよかった」、「工学、農学、歴史学など、専門や所属が異なる報告が聞けて、興味深く、勉強になった」、「個別の現場での取り組みの積み重ねのうえに地域連携を考えるという構成で、会の趣旨を具体的に理解することができた」などの感想が寄せられた。

なお本協議会は、兵庫県教育委員会との共催であった。また、平成27年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の採択事業である、「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」の事業の一環として開催された。

以下、当日の記録を掲載する。なお、報告とコメントについては、それぞれ協議会後に改めて文章化していただいた。

（文責・前田結城）

プログラム

11:00 ～ 11:10　主催者挨拶
内田一徳（神戸大学理事・副学長）
増本浩子（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター長／人文学研究科長）
11:10 ～ 11:20　主旨説明
奥村　弘（神戸大学地域連携推進室室長／地域連携センター副センター長）

第1部　活動報告　11:20 ～ 12:05
11:20 ～ 11:35
槻橋　修氏（神戸大学大学院工学研究科准教授）
「福崎町におけるジオラマ制作の活動について」
11:35 ～ 11:50
井上勝盛氏（篠山市立中央図書館）
「篠山市立中央図書館地域資料整理サポーターの結成と活動」
11:50 ～ 12:05
小原康彦氏（香寺歴史研究会）
「姫路市香寺町・土師地区の大字誌編集について」
12:05 ～ 13:30　昼食・交流会

第２部　シンポジウム「地域で歴史を学びあうことのおもしろさ」 13:30 ～ 15:40

13:30 ～ 13:50

前田結城氏（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

「今回のテーマ設定に関するご説明」

13:50 ～ 14:30

川口利和氏（丹波古文書倶楽部代表者）

「地域活動の現状と多様な展開」

※関連コメント

木村修二氏（神戸大学大学院人文学研究科学術研究員）

14:30 ～ 15:10

坂江　渉氏（兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室研究コーディネーター）

「現地調査を踏まえた歴史研究の大切さ―大学・博物館での経験にもとづきながら―」

※関連コメント

岸本道昭氏（たつの市教育委員会教育事業部文化財課主幹）

15:10 ～ 15:40

清野未恵子氏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科助教）

「地域住民・学生・教員の学び合いを促進する土壌をつくる―神戸大学篠山フィールドステーションの事例から―」

15:40 ～ 16:00　休憩・交流会

全体討論　16:00 ～ 17:15

主催者挨拶①

内田一徳
神戸大学理事・副学長

第 14 回 歴史文化をめぐる地域連携協議会へのご参加、ありがとうございます。

神戸大学大学院人文学研究科では、大学の地域貢献事業の一環として、2002 年 11 月、地域連携センターを設置しました。それ以来、歴史文化の保全・活用を目的とする自治体や住民団体との連携事業を進めてまいりました。各事業をご支援いただいている皆様にあつく御礼申し上げます。

センターでは各年度末に、1 年間の活動を集約する意味をこめて、県内の自治体職員・市民団体代表者･大学関係の方々に一堂に会していただき、歴史遺産の保存・活用について議論する協議会を開催しております。これまで 13 回の協議会を開いてまいりました。

過去２年間の協議会では、地域歴史遺産とは何なのか、あるいはその活用のために何が必要になるのか、などの点について議論を重ねてきました。議論半ばではありますが、それを通じてみえてきた点の１つは、歴史資料の分析によって得られた学術的成果や知識を、専門領域だけに閉じ込めることなく、地域社会の人びとがもつ知的欲求や関心に結びつけ、両者間のコミュニケーションを豊かにする事の重要性です。

そこでセンターでは、地域社会の現場で、地域の方々とともに学びあうというスタイルを積み重ねてきました。具体的には、地域歴史資料に関する大学・住民協働の学習会や、現地展方式の地域史料展示会、あるいは大学と地域住民との対話を踏まえた歴史的景観の復元作業など、多岐におよびます。こうした試みは「地域の豊かな自然環境、歴史文化等により育まれた人としての資質、地域社会での支え合い及びふるさとへの愛着に立脚した生活と心のゆたかさを実現すること」という「兵庫県地域創生条例」第２条（2015 年４月１日施行）の理念にも連なるものです。

こうした学びあいの活動の裾野を広げつつ、継続させることができたのは、民・官・学三者が地域の歴史を学びあうことを通じて、《人と人とのつながりを知ることのおもしろさ》と《人と人とがつながることのおもしろさ》をともに分かち合い、それを次の活動のモチベーションとすることができたからです。

そこで今回は、地域連携活動の継続性の根拠ともいえる、地域の歴史を「学びあう」ことの「おもしろさ」について、午前・午後の２部にわたり考えてみたいと思います。

第１部では、近年のあらたな事例について、大学、自治体、および住民団体の三者より報告していただきます。それぞれ先駆的な成果であり、今後の活動の参考になるものと期待されます。

第２部では、今回のテーマにある「おもしろさ」の内実をさらに探るため、現場での実践を踏まえた報告及びコメント、さらにそうした実践の今日的な意義を学術的に深める報告を予定しています。そして最後に、全体を通しての討論をおこないます。みなさま方におかれましては、活発なご発言をいただきますよう、お願い申しあげます。

本年度も協議会の間に時間をとり、各団体の方々が交流できるコーナーやポスターセッションの場を設けております。多くの方々に活動の成果物や書籍等をお持ちよりいただいておりますので、見学・交流していただければ幸いです。

なお、この度、平成 27 年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」として、神戸大学を中心とする「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が採択されました。先に話しましたように、地域創生に取り組む上で、地域の歴史文化を考えていくことは非常に重要なことです。そのため、本日の協議会は、COC+ 事業の一環として位置づけられています。

最後になりましたが、本協議会を共催していただきました兵庫県教育委員会に対して、あつく御礼申し上げます。

主催者挨拶②

増本浩子
神戸大学大学院人文学研究科長
地域連携センター長

おはようございます。ただいまご紹介いただきました、神戸大学人文学研究科長の増本と申します。本日はとても天気がよく、絶好の行楽日和にも関わらずわざわざ大学にお越しいただき、本当にありがとうございました。私たちの人文学研究科に地域連携センターができて、早くも 14 年が経ちます。地域のみなさんの支えでここまで活動を続けられてきましたことに、厚くお礼申し上げます。地域の歴史遺産を連携して保全、活用していくことを目指す地域連携センターの活動は、これまで国立大学の先進的な取り組みとして評価されてきました。

けれどもいま、センターの活動の意味はますます重要になってきたと思います。それは、みなさんもご存じだと思うのですけれども、昨年の 6 月に、文科大臣の通知が出されて、そこに書いてあったことは、人文・社会科学系の学部を社会的要請の高い分野に転換するということを求めるものだったのです。この通知に対しては、教育・研究の世界はもとより、経済界からも反論が起きて、文部科学省は、それを通知の誤解であると弁解しました。けれども、実際に国立大学の一部は人文系の縮小・再編に踏み切り、報道されているとおり本学でも人文色の強い研究科・学部の統合が進められています。文科省が火消しをしているように、人文社会系不要論は大学の様々なところにくすぶり続けているのが現状です。一国の大臣が誤解を招くような通知を出したことは遺憾としか言いようがありませんが、嘆いているばかりでは、問題は解決しません。たとえ誤解を招く通知であっても、このような通知の背後にある人文学不要論を越えていくためには、人文学を志す私たちが、人文学と社会との関係についてより真摯に考え、人文学の意義が社会で広く認められるように努めなければならないでしょう。

このように考えたとき、地域社会の様々な人びとと大学が共同することを目指すセンターの活動は、大学の研究の意味や人文学の未来・本義を社会のなかで問い直す取り組みとして改めて注目されるのではないかと思います。実際問題として、最初にも司会の方が言っておられた通り、本日は 55 団体 115 名の方々にお越しいただき、この瀧川会館がいっぱいになって、座れそうにない方も出てくるような状況です。こうしたみなさんこ

そが社会であって、社会の要請とはこういうことだと思います。ですから、文科省がどういう風に言っていようと、私たち自身が実際問題として社会からこういう風に求められているのだということを、大きくアピールしていきたいと思います。みなさんの方からも是非、大学あるいは各省庁に働きかけていただければと思います。内田先生、たまたま今日は大学を代表して座っておられるので、名指しで申し訳ないのですけれども、人文学も社会に求められているということをしっかり見てくだされば幸いです。本当にこの場に武田学長がいてくださったらどんなにいいかと思います。私たちは社会に役に立たない学問をやっているみたいなことを言われているのですけれども、どこが役に立たないのでしょうか。こういう形で、人びとから求められているし、こういう形で人びととつながって、私たちは研究をおこなっているのだということを、武田学長にも是非知っていただきたいと思います。内田先生は今日これを目の当たりにされて、よくよく分かっていただいたと思いますが、武田学長に是非お伝えいただきたいと思います。大学院の人文学研究科とその下に文学部がありますが、文学部を小さくしたり、ましてや無くしたりすることがないように、是非是非お願いしたいと思います。文学部とか人文学研究科というものが神戸大学から無くなったら、こういうイベントは絶対に開けないし、今までやってきたことも水の泡だと思います。是非よろしくお願いします。

それで、本日のテーマで目を惹くのは「面白さ」という言葉です。学問の面白さ、学んでいくことの面白さ、楽しみ、ともに活動する面白さや楽しみを正面から捉え、それが社会を良くすることにどうつながるかを問うことは、まさに人文学的な問いではないかと思います。最も身近な社会である地域の中で、研究者と市民が共同すること、そしてその活動の中から、地域に留まらない普遍的な問題を発見し、更にそれに取り組んでいくこと、それが今日の活動の中で、人文学の本来の意義が再確認されることを心より期待しています。本日の協議会が実り多いものとなるよう祈念して、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

主旨説明

奥村　弘
神戸大学地域連携推進室長
人文学研究科地域連携センター副センター長

みなさん、どうもまたお会いできましてありがたく存じます。初めてお会いした方もおられますが、今回は一緒に地域で活動されている方々にたくさんお集まりいただき、まことにありがとうございます。先ほどからすでに理事や研究科長より、今回の基本的な趣旨についてはご説明申し上げておりますので、私からお話しすることはほとんどないのですが…。改めてセンターの行ってきたことを振り返りますと、やはり「地域歴史遺産」と私たちが呼んできたものは、地域の中で、みんなで、その地域の記憶を次の世代に引き継いでいくために私たちに何ができるか、ということを考える材料となってきました。そうした「地域歴史遺産」を地域の歴史文化の基礎として大事にしていく、ということを本センターはずっと、14年間、さまざまな形で、たくさんの方々と考えてきました。

一般論的に、「地域遺産は大事である」とか、「地域の歴史と文化は大事だ」、などと言い続けているだけでは仕方がありません。最も重要なことは、「どのようにすればそれが未来に引き継げるのか」ということです。しかしながら、それを実現するにあたり、ものごとを難しく考えすぎたり、「こうあるべきだ」などとばかり考えていますと、関係者は疲れてしまいます。やはりみんながお互いに地域の歴史について学んだり、語り合ったり、またそれについて、同世代のみではなく自分たちの子供たちにも語ったりといったことが次々と広がるような楽しいやり方、難しく言うと方法ですが、その方法そのものをお互いに学び合っていく

ことがとても大事ではないか、と考えております。

そうした意味で、地域の歴史文化というものは、必ずしも歴史学を学ぶ者のみによって豊かになるわけではないと思います。今回は神戸大学のなかでも歴史学にとどまらないさまざまな分野の方々にもご報告いただくことになっております。そうした多分野からなる方々と協力しながら歴史文化がつくられていくということを、みなさんとともに考えてみたい、これが今回の狙いの一つでございます。たとえば、槻橋先生からは、工学研究科・工学部との連携による、ジオラマを用いて地域の歴史的景観を再現するという活動について報告があります。また第２部では、清野先生より篠山フィールドステーションを拠点とした、農学研究科の篠山市内での多様な取り組みについて報告があります。このように第２部においては、地域の文化について、自然や農業、あるいは歴史や文化といったさまざまな側面から考えてみたいと思います。

何より、今回のテーマにある面白さの要素として、地域の歴史文化をともに学びあうなかで、人びとの関わり合いの輪が広がっていくこと、また学びあいによって新しい発見が促されるということ、これが最も重要ではないかと考えております。そして、人の輪の広がりが、協議会を開催することによってより大きなものとなっていくことを願っております。

ここでCOCについて少し説明します。COCとはCenter of Communityの略称であり、大学が地域の中心として機能するための授業をCOC事業と呼んでおります。この事業は神戸大学だけではなくて、兵庫県の大学が協力して行うため、COCにプラスを付けてCOC＋と呼んでおります。そして、大学が地域の要としての役割を果たしていくうえで、歴史文化もまた重要な位置を占める分野となっています。たとえば今回は、COC+の参加大学ということで、園田学園など、県下の他大学からもご参加がございます。このように、COC+事業では、多数の大学の人文学に関わるに方々と協力して、兵庫県の地域社会をフィールドとして、歴史文化について考える、そうした事業を今年から５年間にわたり実行することになりました。COC+事業を通じて、みなさんの多様な活動の支えになりたいと思っております。ですから、まだ聞き慣れない言葉ではありますが「COC＋」、これが今始動したということを、本協議会を通じてみなさまにも知っていただければ幸いです。

一方で、本協議会は、たんに大学と地域が連携するだけではなく、地域の多様な団体の方々が親交を深める場、お互いの知恵を交換しあう場でもあることに、その魅力がございます。会場の１階では、諸団体のポスター展示や出版物の交換も行われております。お昼休みには交流の時間も設けておりますので、みなさま方にはこの時間を有効に使っていただければ幸いと存じます。

以上、長丁場とはなりますが、本日お越しくださったたくさんの方々と、しっかりと勉強したいと思います。なにとぞよろしくお願い致します。

第１部　報告①

福崎町におけるジオラマ制作の活動について

槻橋　修
神戸大学大学院工学研究科准教授

はじめに

（１）開催のきっかけ

福崎町の嶋田正義町長の発案により、柳田國男の生家がある辻川地区の町の様子をジオラマでつくる計画が立ち上がった。柳田は1875（明治８）年、兵庫県田原村辻川（現福崎町辻川）に松岡家の６男として生まれ、1887（明治20）年に上京し長兄の下で暮らすようになるまでの12年あまり、この地で育った。故郷を後にして約70年後の神戸新聞60周年事業として1958（昭和33）年１月から９月にかけて計200回連載された柳田の回想録『故郷七十年』には、当時の辻川の情景が細やかに描かれているが、他に地域の時代考証を行うための史料に乏しかったため、現在の辻川地区のジオラマ模型を制作し、地域住民から地

域の時代変遷の記憶を収集するワークショップを行い、住民それぞれにとっての〈故郷七十年〉と呼べるような故郷の思い出を、まちなみ模型上に重ね合わせて記録を行った。

（２）槻橋研究室の取り組み

槻橋研究室では、「『失われた街』模型復元プロジェクト」として、東日本大震災被災地で「失われた」街や村を500分の１の縮尺の模型で復元し、地域に育まれてきた街並みや環境、人々の暮らしの中で紡がれてきた記憶を保存・継承していく活動を行ってきた。

１．開催概要

ワークショップの会期は2015（平成27）年８月８日（土）～８月12日（水）、会場は辻川公民館で行われた。主催は福崎町及び神戸大学大学院工学研究科槻橋研究室、協力として神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが加わった。ジオラマ制作の手順については、まず学生８人が国土地理院の等高線データや航空写真を参考に、発泡スチロールなどで２メートル四方、高さ約20センチの白い街並み模型を作成する。そのうえで、辻川公民館に招いた住民から、「子どもの頃にどんな店があったか」、「街のどのあたりで、どのような遊びをしたか」など思い出を聞き取り、それを小型の旗に記載して模型の当該地点に刺したり、彩色を施したりしてジオラマを完成させていく。住民の話は、地区の変遷が分かりやすいよう、戦前、戦後20年、高度経済成長期、平成以降と時代別に色分けがなされている。

２．ワークショップの結果

来場者数はのべ70名あまりとなった。住民の証言によって立てられた記憶の旗は723本を数え、聞き取りの際に採取した「つぶやき」の数は約800項目にのぼった。現在、記録内容の集計・分析が行われている。

このワークショップに参加した工学研究科２年の佐野美幸さんは、読売新聞の取材に対して「思い出の積み重ね地区の歴史を形作っている。模型を通じて、様々な人が記憶を共有できると思う」とコメントした。

※この原稿は、当日の槻橋修氏のレジュメと以下の記事を参照し、前田結城が文章化したものである。

＜参照記事＞

・『読売新聞』2015年10月28日（水）付朝刊

・「東日本大震災復興支援 失われた街 模型復元プロジェクト」http://www.losthomes.jp/about

第１部　報告②

篠山市立中央図書館地域資料整理サポーターの結成と活動

井上勝盛
篠山市立中央図書館

これから報告する概要は、次のとおりである。

篠山市立中央図書館では、まちの歴史や文化を未来に伝えていくため、また、利用者の皆さんの調査研究に活用いただくため、平成25年度に市民ボランティアによる地域資料整理サポーターを結成し、神戸大学に指導を仰ぎながら地域資料の整理に取り組んでいる。結成１年目には楽翁文書の目録が完成し、２年目からは合併前の丹南町史編纂資料の目録を作成している。この他では、元丹南町史の編纂委員や郷土史家等をお招きし、研修会を実施して視野も広げている。

したがって、これから報告する内容は、図書館が神戸大学と連携し、地域住民と共に地域の歴史遺産を守る、まちづくり活動について報告する。活動フィールドが図書館の館内と限定されているが、兵庫県内にある図書館の一つの取り組みとして報告する。

１．地域資料の現状と課題

まず、図書館が長年抱えてきた問題について、説明する。

現在、図書館には約18万冊の蔵書がある。これら全てが図書館システムに登録されているかと

いうと、そうではない。実は、古文書をはじめ5000点以上は未登録の状態である。職員自身で登録できれば良いが、そこで立ちはだかったのが文字による壁である。古文書はくずし字で書かれている。くずし字は、慣れていないと読むことができない。習得するには３年～５年はかかるだろうと言われている。そのようなところが原因となり、職員では登録できず、倉庫で保管してきたという内情がある。これが、篠山市立中央図書館における、未整理地域資料の問題である。

２．地域資料整理サポーターの結成と活動

そこで、結成されたのが地域資料整理サポーターである。神戸大学の協力のもと地域資料整理サポーター養成講座を開催し、その受講生の中から、整理作業に関心を持つ市民ボランティアで結成された。メンバーは13名である。

活動形態は大きく分けて３つある。

一つ目は、①定期的活動である。サポーターは中央図書館で神戸大学に指導を仰ぎながら目録を作成している。年間６回の活動を取り、１回の活動時間は２時間である。また、合併前の元丹南町史の編纂委員や郷土史家等をお招きし、研修会も実施して視野を広げている。他には、活動を通して知った関心のあるところを読み込み、分かりやすくまとめた資料を使ってサポーターが学習発表することもある。

二つ目は、②自主的活動である。自主的活動には次の３つの活動形態がある。

一つ目は、（ｉ）館内に開設した活動室で目録を作成することである。これは、先ほどの定期的活動で行っている目録作成と同じ作業で、自主的活動でも作成することで更に進捗を図っている。

二つ目は、（ii）手書きで翻刻された資料をワープロ入力することである。丹南町史を編纂するにあたり、収集した古文書を当時の編纂委員が解読し、手書きで翻刻された紙ベースの資料もサポーター活動室に保管している。今後、資料として使いやすくするため、ワープロ入力も併せて進めている。

三つ目は、（iii）神戸大学「夏期篠山市古文書合宿」の学生と共に実習し交流することである。神戸大学は毎年夏に篠山フィールドステーションで学生を対象とした「夏期篠山市古文書合宿」を開催されている。ここに、サポーターが参加して、篠山に関する古文書の整理作業を共に行って、外部との交流を図っている。

以上が、自主的活動の３つの活動形態である。

それから全体の活動形態の三つ目、③その他：地域資料現地調査である。これは、元丹南町史編纂委員を迎えて研修会を開催した際に、次のような話題が上がった。「当時古文書を収集解読していた編纂委員の方がいた。既に亡くなれてはいるものの、ご自宅には今も当時の貴重な資料が残っているのではないか」というものであった。そこで、元編纂委員の先生やサポーターがこのご家族と共通の知り合いであったこともあり、数名で訪問した。結果は「家を片付けた際、当時の資料の殆どをこの前処分したところです」とのことであった。現在、地域資料が失われつつあるとは聞いていたものの、そのことを私たち自身が直面した出来事で、期待していただけに非常に残念な思いをした。

３．効果

以上、図書館が抱えている問題、課題、それに対する取り組みを説明してきた。次に、これらの取り組みを通して、得られる効果について以下の通りにまとめてみた。

（１）未登録の地域資料に書誌データを与え、所蔵図書を把握できる。
（２）郷土に関するレファレンスに利用できる。
（３）篠山市史編纂参考資料として提供できる。
（４）地域住民と共に地域の歴史遺産を守る、まちづくり活動ができる。
（５）篠山の歴史文化を未来に伝えることができる。

（１）～（３）は図書館の本来の役割に関するもので、（４）と（５）は篠山の図書館の特色的な取り組みになるのかもしれない。

おわりに

先人たちは、篠山の歴史文化や暮らしを伝えてくれる地域資料を大切に守り伝えてこられた。この地域資料が失われることは、すなわち地域の歴史が失われることになる。篠山市は平成27年に、日本遺産認定に続き、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟が認められた。地域資料整理サポーターは、先人から受け継いだこの誇れる篠山の歴史文化を未来に伝える活動に取り組んでいる。

【参考資料：これまでの活動の経過】

■平成23年度

(1)神戸大学と篠山市立中央図書館が地域連携事業に合意する。

■平成24年度

(1)神戸新聞平成24年11月10日『貴重な古文書次世代へ～データベース化着手～』が掲載される。

(2)まちづくり地域歴史遺産活用講座を開催する。

(3)地域資料整理サポーター養成講座を開催する。

(4)神戸新聞平成25年2月24日『歴史資料の整理重要～サポーター養成講座開講～』が掲載される。

(5)神戸大学と篠山市教育委員会は『中西家文書の調査・研究に関する覚書』を締結する。

■平成25年度

(1)地域資料整理サポーター養成講座を開催する。

(2)地域資料整理サポーターの結成と活動を開始、楽翁文書の目録作成に取り組む。

(3) 篠山市広報「丹波篠山」平成25年11月号『本を守る。歴史を守る。』を特集掲載する。

(4)楽翁文書の目録が完成する。

(5)第8回篠山市・神戸大学地域連携フォーラムにて3年間の活動報告『篠山市立中央図書館地域資料整理サポーター結成と活動』を発表する。

(6)神戸新聞平成26年1月26日第8回篠山市・神戸大学地域連携フォーラム『取組報告～篠山市と神戸大の連携活動』が掲載され、紹介される。

(7)地域資料整理サポーター活動室開設と自主的活動を開始する。

※以上の3 年間の経過詳細を、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報『LINK』(2014年発行）に「篠山市立中央図書館地域資料の整理に向けて～地域資料整理サポーター結成と活動～」と題して寄稿している。

■平成26年度

(1)丹南町史編纂資料の目録作成を開始する。

(2)神戸新聞平成26年10月24日『郷土史料を次世代へ』が掲載される。

(3)地域資料整理サポーター研修『丹南町史編さん資料を未来に伝えるために～元編さん委員に聞く～』を開催する。

(4)神戸新聞平成26年10月27日『丹南町史編さんの話聞く』が掲載される。

(5)地域資料『丹南町史編纂関係資料』現地調査を実施する。

(6)神戸大学･神戸新聞連携協定シンポジウム「つなぎいかす地域の力～篠山からの挑戦～」にて『篠山市立中央図書館と神戸大学大学院人文学研究科の連携事業～地域資料整理サポーターの結成と活動～』が報告発表され、紹介される。

(7)神戸新聞平成26年12月22日神戸大学・神戸新聞連携協定シンポジウム『つなぎいかす地域の力～篠山からの挑戦～』が掲載され、紹介される。

(8)神戸大学『LINK』(2014年発行）に「篠山市立中央図書館地域資料の整理に向けて～地域資料整理サポーター結成と活動～」を寄稿する。

(9)神戸新聞平成27年1月24日第9回篠山市・神戸大学地域連携フォーラム『篠山での活動報告』が掲載され、紹介される。

(10) 第 9 回篠山市・神戸大学地域連携フォーラムにて『人文学研究科の取り組み紹介』が報告発表され、紹介される。
(11) 今田町史編纂資料を今田支所から中央図書館へ移管する。
(12) 山陰民俗学会「山陰民俗研究」に『近現代資料活用論～野の学問の実践構築に向けて～』が掲載され、紹介される。

■平成 27 年度

（1）地域資料整理サポーター研修
篠山市日本遺産認定に寄せて『地域資料を未来に伝えるために～私の思い出話を通して～』を開催する。
（2）神戸新聞平成 27 年 7 月 14 日『古文書保存の苦労語る』が掲載される。
（3）地域資料整理サポーター研修『歴史資料が価値あるものとされる社会とはいかなる社会なのか？』を開催する。

第 1 部　報告③
姫路市香寺町・土師地区の大字誌編集について

小原康彦
香寺歴史研究会

はじめに

香寺町史『村の記憶』・『村の歴史』全 4 巻の完成を機会に、平成 23 年 2 月、各集落で大字誌をつくろうとシンポジウムが開かれた。土師でも大字の移り変わる姿を次世代に伝え残したいとの思いから発刊の運びとなった。

1．『伝える郷土史　ふるさと土師』発刊の動機

寛延 2 年の「村明細帳」当時から昭和 20 年までの約 200 年間、100 戸程度だったムラの人口が平成以降の土地区画整理事業で新興住宅が増え、土師というムラの歴史や生活の変化、伝統行事を知らない人が増えて、郷土の歴史が今や伝えられていない現状となった。暮らしの変化を大正・昭和時代を過ごした人々の体験から『いま』と『むかし』を記録し、忘れられようとしている仕事や生活の様子を後世に語り継ぐことが今を生きる者の使命と感じ、大字誌の編集に取り組んだ。

2．編集概要

当集落には江戸時代から昭和 60 年まで約 240 年間にわたる古文書 1,257 点が保存されている。歴史の古いムラだけに掲載したい事柄が数多くあり、3 年半の期間を費やして史実の典拠を古文書から探す資料収集と聞き取り調査を行った。素人なりの原稿を作成したが、自治会行事や会社勤め、営農作業などがあって思うようにはかどらず、整理、校正に至るまで多大の苦労があった。

3．編集過程

1　自治会総会で発刊提案・予算化
2　大字誌編集委員会の発足
3　原稿・資料の収集、選択
4　編集方針の決定（目次・本の体裁）
5　収集した原稿の推敲・整理
6　印刷業者の決定（相見積り）
7　ゲラ刷りの校正
8　配本計画（配布・献本・保存）

発行は平成 27 年 3 月。印刷は、ワードでデータを提供し、ダイレクト印刷としたので比較的安価で出来た。配本は、自治会は全戸無料配布、購入希望者には有料、町内自治会・関係機関へは贈呈する。

4．本の体裁

1　A4 判、横組、並製本
2　全 292 ページ（口絵・資料編とも）オールカラー

5．目次

第 1 章から第 10 章とし、大見出し 40、小見出し 108、コラム 7 とした。

第 1 章　土師むらの由来
第 2 章　土師村の『いま』『むかし』
第 3 章　むらの生活『いま』『むかし』

第４章　むらの秋祭り
第５章　むらの農業『いま』『むかし』
第６章　むらの先覚者を石造物から探る
第７章　むらの神社と寺院
第８章　むらの遺跡と共同墓地
第９章　むらに残る石造物
第１０章　むらに伝わる伝説、言い伝え
（資料編）　資料１～１５、村明細帳、参考文献、記録写真集

６．特色

１　『いま』『むかし』を比較し、子どもの頃の記憶と体験、聞き取り調査を交えて記述する。
２　先覚者は子孫の居住も少なく墓標から調査する。
３　「香寺町近代史年表」と村の古文書から年表を作成する。
４　資料編を置き、自治会規約・細則など１５編を掲載する。
５　巻末に「寛延２年　土師村明細帳」の全文を収録する。
６　見やすく、読みやすいようにコラム・写真・図を多く挿入する。

編集委員として歴史を振り返る時身近に感銘を覚えたし、自治会員には将来にわたってこうした文化や先人の遺産を受け継ぎ、誇れる「土師」にしてもらいたいと期待している。

７．結びに

『ふるさと土師』は村の歴史を学び、子どもや孫に伝える手引きである。全戸配布し、反響の声を聞かれる頃、文書や実物でより深く理解してもらおうと「資料展示会」を平成２７年８月に２日間開催し、見学・来訪者が１５０数人あった。展示会には子ども達が作成した「地域マップ」も展示した。今後は子ども会・老人クラブとタイアップし「地域内のヒストリー探訪」をして、自分たちの住む地域を再発見し、このムラの良さを語り継いでいきたいと思っている。

８．資料展示会概要

『伝える郷土史「ふるさと土師」』を配本し、反響の声を聴く頃、より深く理解してくれるよう２日間開催し、見学・来訪は 150 数人あった。

１　大字誌の典拠史料となった古文書・新聞記事の写し・写真・木札等の現物 250 余点を展示する。（明細帳は解読できたかな？）
２　当集落の遺跡から発掘された遺物は「姫路市埋蔵文化センター」に依頼してパネルと遺物 39 点を展示し、森・小柴学芸員の説明を頂いた。
３　絵馬の「仮名手本忠臣蔵」写真を展示、11 段『討ち入り』場面が、元禄 15 年（1702）12 月 14 日夜の史実、当集落でも昔行なわれといた民俗行事「肝試し」のことを解説し、経験者は懐かしがっていた。
４　ビデオを２ケ所設置し、①民俗無形文化財「獅子舞」と②東前畑発掘調査を随時放映した。
５　「土師」を知ってくれるよう小学６年生児童の夏休みに地図上に大字境・山・川・道路等に色を塗り、公共建物・神社・寺院・史蹟・石造物の写真を貼付した「地域マップ」を作成したものを展示した。
６　現物は社寺改修時の木札や石造物の拓本（掛け軸）・宝珠瓦と神輿屋台の装飾品・神紋ほか、獅子舞の獅子頭・小道具一式・「ともしびの賞」額を展示した。

９．資料展示会を終えて

江戸時代の古文書・絵図、地形図等資料の収集・保管状況に感嘆する人、質問や意見、感想と助言を頂いた。展示資料は A3 ファイル 11 冊に保管。「地域マップ」は世代間交流・老人クラブとの懇親時に活用している。

10．香寺町土師の位置

平成 18 年姫路市と合併し神崎郡の南から、姫路市の北東部、播但線・溝口駅の南、中国縦貫道・福崎 IC の南に位置する。兵庫県集落地域整備基本方針に基づき、営農と条件と調和のとれた農用

地と居住環境の整った住宅地を造成し430戸を22班（隣保）で運営する集落である。この事業遂行の事前調査で遺跡から縄文早期の土器・石鏃などが発見され、1万年余前からここで定住生活をしていたと言われている。また、兵庫県指定史蹟「片山古墳」（前方後円墳）、姫路市重要無形文化財指定の「獅子舞」があるなど特筆される集落である。

第２部　テーマ説明

地域で歴史を学びあうことのおもしろさを見なおす

前田結城
神戸大学大学院人文学研究科研究員

ここでは以下、今回のテーマを設定した意図について説明する。

１．「地域創生」時代の歴史文化

「地域創生」というとき、「歴史」の二文字は頻繁に登場する。たとえば、「兵庫県地域創生条例」第２条（2015年４月１日施行）には、「地域の豊かな自然環境、歴史文化等により育まれた人としての資質、地域社会での支え合い及びふるさとへの愛着に立脚した生活と心のゆたかさを実現すること」とある。市のレヴェルでも、たとえば「加西市地域創生戦略の策定について」（「加西市プレスリリース」2015年10月29日）には、「基本目標６　歴史と文化にあふれる加西のブランドイメージを高める」とある。「洲本市総合戦略」（2015年10月）の「第２章総合戦略（４）教育・スポーツ交流支援」の場合は「淡路文化史料館を拠点とした体験講座などを通じて、郷土史の理解を深めるとともに、歴史文化遺産の活用を通じて、地域に対する誇りと愛着を育む事業を展開する」とされ、かなり踏み込んだ表現も見受けられる。

また、平成27年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」として神戸大学が中心となって進行中である「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」には、事業の一環として「地域の元気づくり教育プログラム」というものがあるが、そのなかで、「多彩な専門カリキュラム」のひとつとして「歴史と文化」が組み込まれている。

以上のことは、歴史文化が「地域創生」のコンテンツとして有用であるという認識が、一定程度一般的なものであることを物語っているといえよう。

では、なぜ歴史文化は「地域創生」に資することになるのか。それはたんに商業的価値が見込まれるがゆえに有用である、というものに止まるのだろうか。ここで参考までに小田切徳美『農山村は消滅しない』（岩波新書、2014年）の議論をひいてみたい。氏は「地域づくりの三つの柱」として、「①暮らしのものさしづくり」、「②暮らしの仕組みづくり」、「③カネとその循環づくり」を挙げる。ここで①については、さらにつぎのように述べられる。地域づくりにおいては、「地域をつくるのは自らの問題だという当事者意識」をもった「人」が必要であるが、現実には農山村社会における「誇りの空洞化」が起きており、それは今日容易ではないとされる。そこで氏は、「誇りの空洞化」を打開する方法として「暮らしのものさし」を積み上げることが必要だとし、その「ものさし」のひとつとして「地域の歴史・文化」を挙げているのである。

だが、例年の協議会における議論をみてもわかるように、地域の歴史文化という「暮らしのものさし」を積み上げる作業は、決して容易ではない。また、目に見えやすく、わかりやすい「歴史」というものがえてして非歴史的な創造物にすぎないことがある、ということは前年度の協議会でも主要な論点となっている。

２．「地域歴史遺産」をめぐり学びあうことのおもしろさについて

小田切氏のいう「暮らしのものさし」としての歴史・文化は、本センター流にいえば、「地域歴史遺産」の保全と活用によって実のあるものとなり、また継承されていくことになる。結論を先にいえば、筆者は、「地域歴史遺産」が保全・活用

される秘訣は、それをめぐって人びとが時間のなかでの地域（地域の先人たち）のつながりを再確認すること、それと同時に再確認しあう作業をともにすることで今のわたしたちがつながること、この両方の「つながり」が生み出されていくことのおもしろさを実感することにあると考えている。

筆者自身は、丹波市との連携事業に従事するなかで、このことを強く感じることがある。おもしろさに気づく瞬間を具体的にいうならば、第一に学びあいの場をよそ者かつ若者の大学と地域住民とが共有すること、それ自体が地域活性化につながっていることを実感したときである。筆者は、今もそうだが、地域歴史遺産をめぐって学びあうことが、本当に「地域活性化」につながるのかと常々悩んでいる。そうしたなか、2015 年 11 月に丹波市氷上町・氷上自治会と共同で区有文書整理をおこなった際、住民の方々より「目録づくりがイベント性を持っている」あるいは「(現在地域おこし等の活動に参加されていますか、との質問に対して）今回の古文書整理です」などの感想を得ることができた。史料整理は研究者の我々にとって、地味な作業であり、成果が生まれる前の準備段階だという認識が、ふつうはあると思う。しかしながら、整理作業を共有することのメリットは、①なにより共同作業であり、労苦を分かち合うという認識が生まれる、②比較的短時間で多様な史料にあたることにより、地域史の多面性をつかむことができる、③歴史の勉強は難しくてついていけないという住民を「共同作業」という名目で巻き込むことが可能となる、以上の点が挙げられると考える。そうした意味で、史料整理そのものが実は地域イベントといえるのである。筆者はそれを感覚的にはわかっていたが、氷上自治会の方々と接し、上記の感想をいただくことによって、ようやく言葉で表現できるようになった。

おもしろさに気づく瞬間の第二は、時間軸の中で地域社会・地域住民をつなぐという役割を大学が、住民が、担っていることに気づいたときである。これについて、丹波市春日町棚原自治会の上田脩氏は、2012 年度前期に文学部・人文学研究科で開講された「地域歴史遺産保全活用基礎論」のレジュメのなかで、つぎのように述べている。

> 平成一六年一一月一日から六町合併による新市･丹波市が誕生することになったその頃(中略）原点に戻って「小さな単位での自治の確立」が重要であり、その為に欠くことができないのは「地域住民の連帯」であると認識しました。住民の連帯意識を作り出す手がかりの一つは、我々先人が創り上げてきた共通の故郷・棚原の歴史文化を正しく認識し、語り合っていく事から生まれるのではないかと考えました。以上のような背景から数多くある棚原の歴史文化資源に光を当て、調査・分析した上で大切に保護・継承し、正確に後世に伝えていく「つなぎ」の役割を果たすことを使命として平成一六年四月に「棚原パワーアップ事業推進委員会」を結成しました。

地域住民がつながるために、ともに地域をみつめなおす。地域をみつめなおすというとき、地域を時間軸のなかでとらえるという思考過程がともなわれる。時間軸のなかで地域をとらえなおしたとき、地域の「生きられた歴史」が今を生きるわたしたちの眼前に再現され、それがわたしたち自身の「歴史」とつながりはじめる。上田氏の発言からは､このことが明確に表現されていると思う。こうした「つなぎ」の役割を担っていることを実感するとき、それなりの充実感とおもしろさを体感することができる。そして､棚原の取り組みは、今、先にのべたように氷上自治会へと伝播し、あらたな「つながり」をみせているのである。

以上にのべたことが、地域歴史遺産をめぐって学びあうことのおもしろさについて筆者なりに考えたことであるが、これはどこまで普遍的なことなのか、またこのおもしろさへの気づきを、いかにこれからの民・官・学連携のなかで活かしていくか、これについて議論を深めることが今回の協議会の目的なのである。

第２部　報告①

地域活動の現状と多様な展開

―丹波古文書倶楽部をはじめとして―

川口利和

丹波古文書倶楽部代表者

１．倶楽部活動概要

・発足の契機は 2010 年度たんばシニアカレッジ（丹波市主催）で１年間活動していた古文書講座受講者が終了時に有志（４人）で立ち上げた。目的は（地域で発見された古文書を中心に）古文書の調査研究によって、（地元活動などで）その成果を次世代へ伝える　ことである。

・2011 年４月発足時の会員数 51 人は全員丹波市民であった。現在の会員数は 36 人で住所は丹波市 32 人（88.8%）、篠山市・三田市・西脇市など各１人（各 2.8%）と参加者が丹波市周辺地域へ拡大しつつある。

・年間 12 回の例月講座は毎月第２土曜日の２時間である。会員募集は毎年１回市内住民センター等への募集チラシ配置、新聞記者発表等で対応している。

・概ね年間１～２回のフィールドワーク（現地研修）は３時間半程度丹波市内で開催している。会員以外の市民参加に向けては、毎回新聞記者発表していることで参加がある。

・参加者へ実施したアンケートでは、①楽しいものではなく努力が必要と実感した、②古文書に触れる機会があり楽しみ、③丹波の一時代前の様子などを知識の中に取り入れたい、④先輩が古文書解読の妙を楽しんでおられる姿を拝見し学習希望、⑤学生時代の知識のブラッシュアップ、等様々な動機で参加しているが、意欲的に学ぼうとする姿勢が顕著である。

・会員の当倶楽部以外での活動状況は、①地域内保存の古文書学習会、②地域狛犬をテーマに講演活動等、③丹波市豪雨災害を目の当たりにし古の災害について学習、④他地区古文書解読講座学習により解読能力の向上で、地域歴史発見の活動へ進展、その他、会員それぞれの立場で本倶楽部活動と並行して発展的な方向へ対応しつつある。

・本倶楽部会員が加入している地域活動団体としては、中井権次顕彰会（柏原町）、氷上郷土史研究会（氷上町）、本郷古文書を読む会（氷上町）、春日歴史民俗資料館文化財友の会（春日町）、市島町史実研究会（市島町）などがある。

２．一方、丹波市民の歴史学習等に対する認識としては①史跡、資料館めぐりなどを楽しみたい、②講演会で話を聞きたい、③歴史講座などに参加したい、が上位３件で 56％強を占めている。

３．また、丹波市民の歴史等に対する生涯学習の位置づけとしては「……歴史、伝統文化を活用した学びの機会の提供、地域の魅力発掘と新しい学びの創出」としている。

４．丹波市内には歴史文化資源が豊富であり、活用事例を列挙する。

・株式会社 まちづくり柏原（2000 年７月設立・丹波市三セク）

①イタリア料理店「オルモ」では築 100 年余りの呉服店を、②丹波野菜と鹿料理店：無鹿では由緒ある屋敷エリア内において築 100 年程の町家を、③たんば黎明館等では 1885 年氷上郡各町村組合立小学校として後、直前の大手会館の活用で丹波市より指定管理業務委託され、「たんば黎明館」としてオープンし、同時にフランス料理店「ル･クロ丹波邸」等をたんば黎明館内にオープン、④丹波素材の菓子、薪窯ピッツァ店：中島大祥堂丹波本店では 150 年の歴史を持つかやぶき民家を、それぞれ再利用

・中井権次顕彰会（2014 年１月発足）主に江戸時代に社寺の装飾彫刻を手がけた柏原の名工中井権次一統の業績を紹介し、作品を地域文化資源として大切にする

・丹波市／たんばすまいるウォーク 21　ウォーキングマップの中で熊野神社、達身寺、狭宮神

社、白毫寺、兵主神社の歴史的社寺の経由紹介

・丹波市商工会／柏原カップリングパーティー
男女15組が応募し、創建1000年を迎える柏原八幡宮で男性からの告白を実施したところ6組のカップルが誕生

第２部　コメント①
川口報告によせて

木村修二
神戸大学大学院人文学研究科学術研究員

川口報告を通して感じたのは、地域古文書学習会のポテンシャルの高さを改めて感じたという点である（木村「地域文献資料の活用」、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』岩田書院、2013年も参照のこと）。

「古文書」というツールのもつ社会教育的有用性を考えるとき、有効と思われるのは従来から各地で取り組まれてきている古文書学習会の存在である。その形態は、①マスコミ・放送メディア傘下・鉄道会社・文化系企業などが開講したもの、②公的社会教育施設が主催するもの、③私的・自主的サークルとしてなどさまざまだが、社会教育との関わりでは特に②が注目される。

公的社会教育施設が主催するものは、回数（5回講座限定など）や期間（1年間など）が限定され、その後はそれきりとなるか、既成グループとして自主運営化を促進する方向があろうかと思う。後者のばあい、公的社会教育施設の姿勢には一般的な傾向として２つのベクトルがあると思われるが、第一に、自主運営化後は、ほとんど公的社会教育施設は関与しないもので、これには自治体における公共サービスの公平性というロジックが理由にされる場合が多い。第二に、自主運営化後もそのグループとの連携関係を維持し、公的社会教育施設側は、テキストや会場を提供するなどのバックアップを行う一方、公的社会教育施設に持ち込まれた一般からの古文書解読要請を自主グループに委託することで、テキスト提供と成果物の活用を兼ねることができるというメリットがある。

ところで、公民館に代表される公的社会教育施設の機能として、社会教育法においては定期講座の開催が規定されている。しかしながら、この規定が期間限定を前提としているとすれば、くずし字判読の技術取得の場としての古文書学習会のあり方が、本質的に長期的・連続的な開催を条件としていることからして、いささかなずまない講座形態といえるかもしれない。その意味でも、上記の後者のケース、すなわち運営そのものは自主グループ化して自治体と連携関係を持つことが理想的なのではないかと考える。ただこう述べると、新自由主義的な発想であるとの批判があるかもしれないが、緊密な連携関係が維持されるのであれば、そこには双方の弱点をそれなりに補完し合える関係性が成立していると思われる。したがって上記の批判は必ずしも当たらないだろうと考える。

川口氏が提示した古文書学習会参加者のアンケートをみると、参加者は、実に多様な目的をもって参加してきていることがわかる。一つのグループが、参加者の多様で細かいニーズにはなかなか応えられないだろうが、それでもかかる場で活動を続けることで、参加者それぞれに以下のような効果をもたらしている。すなわち、①くずし字解読の技術の取得、②「古文書」が文化財・地域歴史遺産であるという認識を自然に得る、③喜びや一種のカタルシス（読めなかったものが読めるようになる）を得る、④多様な関心が交じりあうことで次のステップに発展する土台となる、といったものである。

川口氏が代表となっている丹波古文書倶楽部のような地域古文書学習会は、多様な目標をもつ参加者のベクトルが交差・交錯する場にほかならず、グループの活動により新たな地域歴史遺産を「産み出す」ことをも可能とするかもしれない。

第２部　報告②

現地調査を踏まえた歴史研究の大切さ

―大学、博物館での経験にもとづきながら―

坂江　渉
兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
研究コーディネーター

報告では、日本古代史を専攻しながら、これまで神戸大学の地域連携センターや、現在のひょうご歴史研究室でおこなって来た研究のうち、その研究スタンスの特徴と意義について述べた。

地域史研究を始めるにあたっては、何よりも研究対象地域における地元研究者、なかでも各自治体の文化財担当者や資料館職員、および地元の民間研究者との間で、個人的な信頼関係を構築することが重要であることを繰り返し述べた。またその成果の一つとして、福崎町と加西市教育委員会との合同調査を通じて、古代の神前郡と賀毛郡との間を結ぶ古道（弥勒坂・吸谷道）を「発見」することが出来た点なども披露した。

第２部　コメント②

民官学連携の重要性

―坂江報告へのコメント―

岸本道昭
たつの市教育委員会教育事業部文化財課主幹

坂江報告は、いくつかの重要な指摘がなされた。

一点目は、地域に入ったとき、怪しまれた経験への反省である。相手先との信頼関係の構築が重要だという点である。まずは知り合いになって、人間関係を作るという基本的な原則の指摘であり、連携という点では、もっとも大切な姿勢である。

二点目は、聞き取り調査から得られる研究成果を重視する点である。机上の勉強では見えてこない地域史の多様性があり、現地で地元の人たちに会い、見て、聞いて確認することで、思いもよらない歴史的事実が発見されるということである。これは、研究者が地域史について調べるときの当然の心構えである。地域を知らない地域史の記述には、地名の間違いから始まり、資料内容に対する誤解や不足、重要資料の見落としがままみられる現状がある。フィールドワークを疎かにしてはならないという指摘である。

三点目は、連携が相手先にとって迷惑なだけの可能性を指摘している。この点に関して、私はそうではないと考えている。確かに片思いの連携は、押し売りであって逆効果にもなる。しかし、双方の思いが一致するところでは、大きな連携の成果が期待できる。事前調整と信頼関係の構築の上で、こうした危惧は解消できるであろう。

たつの市域において、または私の経験上、異なる三種類の活動例を紹介すれば、すべてが連携の重要性を物語っている。

市民主体で歴史や文化を考える会である「いひほ学研究会」では、行政が後援しながら、研究者の協力で９年にわたる活動が続いている。会誌の発刊も８号を重ねた。

たつの市が主催する「古文書講座」は、３年間の活動であったが、市民が参加して調査と研究をおこない、実践的な技術を身に付けた。官が主催し、民が実践し、学が指導したといえる。その成果を記した冊子は、多くの市民が原稿を寄せるにいたった。

研究者が集う「播磨考古学研究集会」は、研究者などが実行委員会形式で主催し、すでに16年の歴史をもつ。それに参加するのは大半が市民であり、活動の基礎を支えているのである。資料集と記録集も計33冊が刊行されている。

つまり、どのような活動であっても、いかなる主催団体であっても、歴史文化をめぐる連携という観点では、市民（民）、行政（官）、研究者（学）は常に連携しているのである。連携なくして深く広がりのある活動は不可能であり、それぞれが持つ欠点を補い合い、長所を生かし合うことで、実りある活動につながっていく実感がある。

もはや連携は、当たり前のことであり、その効果的な方法を鍛えながら、実りある成果を残してゆくことが期待されている。私たちはそれぞれの

立場で、実践する役割をはたしていく必要があると考えている。

第２部　報告③
地域住民・学生・教員の学び合いを促進する土壌をつくる
―神戸大学篠山フィールドステーションの事例から―

清野未恵子
神戸大学大学院人間発達環境学研究科特命助教

１．古文書がなぜ“学び”を創発させるのか

今回の地域連携協議会の多くが、“学び合い”における古文書や歴史遺産のもつ機能を見出すものであったように思えた。私の発表は、古文書をツールとするのではなく、農業や農という行為そのものをツールとした地域における学び合いの事例であったため、他の発表と比べると異質なものとなったように感じた。しかし、なぜ、かくも古文書が人を集わせ、知的関心を満たす喜びを共有するのによいツールなのかが改めて疑問として浮かび上がってきた。そこでまず、古文書がなぜ学びを創発させるのかという点について考えてみたい。

パネルディスカッションのなかで、“時間軸のなかで地域をリアルに捉えることができるのが古文書である”という発言があった。また、“小字（こあざ）の名前などがわからないために、古文書が保存してあった地域の方々と共に解読する必要がある”という。こうしたことから、古文書は、単に歴史的な文書なのではなく、地域と結ばれた文書といえるのではないかと思うのである。

内山（2006）は、宇根豊さんの田んぼで、ジャンボタニシの生態を利用して除草する技術をみて、“上野村（内山さんのもう一つの家があるところ）では役にたたない技術だろう”と述べている。それは程度の低い技術という評価ではなく、むしろ地域の自然条件と結びついた大変すぐれた技術なのではないか、として論を進める。

> 近代の技術は「場所」と結びつかなくても成り立つものを理想としてきました。（中略）しかしそれは根本的に誤っていたのではないのか。その場所がなければ成り立たない技術のほうがすぐれた技術で、普遍的な技術などというものは、場所と結びつかなくても成り立つ程度の技術だったのではないか。（中略）思想にも同じことがいえて、その場所、つまりその地域の風土や自然、文化、歴史などと結ばれて成り立っている思想こそが深い思想であり、場所との結びつきを必要としない思想はその程度の浅い思想だといえるのではないか。
>
> 内山節（2006）『「創造的」であるということ上―農の営みから』より抜粋

思想の深さと、古文書の意味する内容の深さとが同じことを表すとはいえないが、場所と結びついているからこそ古文書に価値がある、またはそうでないと価値が見出されないのであれば、地域と結ばれたままで解読することで、人を魅了する資料となると考える。協議会の会場にて意見を交わした際、「古文書にも人と人との関係性のことなどか、里山の管理の実態について書かれたものがあって…。いまの生活と変わらないんだなって思うの。だから読んでて面白いの」という言葉を聞いた。そのとき、古文書を読み解く動機は、いまに通じる普遍的なできごとに触れることにもあるようだと感じた。よって、時間軸のなかで地域（とそこに生きる人たちの暮らし）をリアルに捉えることができるから、古文書が人を惹きつけてやまないのであろうと結論づけた。だとするならば、古文書は、保管されてきたその地域で読み解かれることこそに意味があるのであり、そこに解読をサポートする専門家が出向くという構造が今後望まれる形なのではないだろうか。

２．“学び合い”の意味

“学び”ではなく“学び合い”にこだわって協議会の発表が進められてきたのであるが（そうだと思っているのは私だけかもしれないが）、私の

発表でもお示ししたように、学び合うのは住民同士だけでなく、研究者（あるいは専門家）と住民、学生と住民も含まれる。本協議会の発表の多くは、古文書を解読するという共通の趣味を通じて新たな仲間と出会えることの楽しさを“住民同士の学び合い”としていたように思う。まずは、住民同士の学び合いにおいて古文書がなぜ有効かという点について考えてみたい。

活動性を高める授業づくりとして協同学習という手法が近年用いられている。協同学習は、学生一人ひとりに仲間と共に学ぶ喜びや楽しさを実感させ、確かな学力と自己の変化成長をもたらす、教授学習に関する理論であり、単なるグループ学習ではないという（安永、2015）。本協議会での発表を参考にしながら古文書を囲む場で起こっていることを推察すると、おそらく、古文書を読むことを目的に集まった人々が、主体的かつ能動的に教えあう形で“学び合う”ということが起こっていると考えられる。大学などの義務教育の過程で、教員らが学生たちの活動性を高めるために苦心するなか、協同学習の理論を用いて授業を展開しているところである。しかしながら、古文書を通じて集まった方々の学び合いは、操作された学習の場ではなく、自然に生まれているところが意義深い。個人にとって興味のある内容だから集まっているのであれば、個々に古文書を読めばいい。しかし、集まって、発見したことを教え、共に学びを深めたいと考えて集まっているのであれば、古文書という材料がそうさせているのである。大変興味深い現象がおこっている。古文書に集う場は、新たな仲間と出会えるだけでなく、学び合う楽しみも学ぶことができる場だといえよう。ただ、どんな内容を主体的かつ能動的に教え合っているのかという詳細については、現場での観察が必要なのであるが。

学生同士の学び合いの場面もすこし観察する機会があったので補足してみたい。篠山市でおこなっている神戸大学文学部夏の古文書合宿では、学生同士が班を作って古文書をひたすら解読する。その場面では、学生たちは懇々と古文書に向かい、班員どうしの会話は少ないように思えた。ただ、なにかボソボソと隣の人に語りかけたり、「いや、あーわからん、、。え、さっきの文章？」といった会話が静かに起こっているのを見ることができるのである。さらに、合宿の最後に発見した内容を各班の代表者が発表するのであるが、発表する内容に対する質問に対して、代表者が回答できない場合に、発見した古文書群の解読を担当した学生が代わって回答することがある。その場面では、“私たち班への質問には班として回答します”というように、班としての仲間意識が芽生えているようにもみえるのである。また、別の班で発見した内容から回答を補完する場面がみられることもあり、班を超えた合宿メンバー全体で学びが促進されているようにみえる瞬間もある。そうしたことから、歴史という、過去のできごとのピースをうめていくという作業そのものに、協同学習を促進する鍵があるのではないかとも思われる。また、この合宿には、様々な時代・地域を専門とした教員が多く参加しており、学生らの理解を促進するのに一役かっている。教師陣にとっても学びがあるとすれば、この合宿は学生同士、さらには学生と教師との間で学び合いが起こっている可能性がある貴重な機会である。

３．非文字の学問と地域

協議会を通して、文学部、人文学研究科として“地域”をどのように捉えているのかを、聞こうと思いつつ聞けずに終わってしまった。内山（2006）は、地域とは、広さの問題ではなく、自然との関係や人間同士の関係、さらには歴史や文化との関係が安定した循環をつくりだしているところと述べている。他の方々の発表を思い返すと、人文学研究科が捉えている“地域”は内山(2006)の考える“地域”に非常に近いのではないだろうか。内山（2006）のいう“地域”の概念を用いて考えたとき、自然と人、人と人、歴史や文化との関係が安定した循環を作り出すには、それを媒介するものが必要であり、その媒介するものは、古文書なのであり、人なのであろう。古文書を地

域と結びつけて読む重要性は先に述べたため、人を介して蓄積されてきたものとその継承について最後に述べてみたい。

文字に残されていない知識も地域には多く存在しているが、おそらく多くは埋没してしまっている。それらを掘り起こすためには、坂江渉氏の発表のように、聞き取り調査という方法を用いて残存している史料に残されていない知識を追加し、地域のできごとを深く読み解いていくしかない。他には、私の発表でお示ししたように、身体知として継承していく方法もあるだろう。私がコーディネートを務めてきた農業をテーマとした実習では、農家と学生との間のやりとりは、文字を介していないことが多かった。無口な農家さんのやっていることをひたすら“見て覚える”という身体知の移転、もしくはうまくいけば口伝してもらえるというようなものである。そうした身体に埋め込まれた知識は、ともに活動してみないとわからないものであるが、自然とそこで生活してきた人とがしっかり結びついてできた知識であり、それは地域を地域たらしめる知識である。イベントのノウハウやその他のありとあらゆるできごとの地域における道理を、つまり、地域を地域たらしめてきた術が、世代を超えて非文字の学問として継承されてきたと内山（2010）はいう。篠山市の農村に通い続ける学生たちは、地域を地域たらしめている術に魅了されていたのではないかと考えているし、大学ではとうてい学ぶことができない非文字の学問の楽しさに引き込まれていると私は考えている。そこに面白さを感じる学生を今後も増やしていくべきであるし、非文字と文字の知とが組み合わさることなどがあれば、より地域を深く知ることができるだろう。非文字の学問を構成する知識や術などのエッセンスは、身体や風景や気候と結びついて露わになると考えられるため、やはり地域を地域たらしめる知識を知る術を身につけるには、足しげく地域に通うしかないのである。

４．さいごに

私は、古文書の、その少し柔らかく、粉がふいたような紙の質感が好きである。また、微妙な筆圧で書かれた文字が、紙の表面のでこぼこを作り出しており、その不思議なものを丁寧に扱う人々に大変興味をもった。古文書合宿を開催する会場の駐在員をしていたために、偶然にも古文書にふれる機会をいただいたのであるが、そうした場に参加させていただいたことに心から感謝している。

パネルディスカッションのなかで、「古文書（現物）を見る機会が少ない」とか、小原康彦氏や川口利和氏の発表においても、「古文書を展示する」場があり盛況だったという。私はまったくその意見に同感で、古文書は実物があってこそ意味がある。そのようななかで、保管場所の問題で史料がだめになってしまったり、破棄される運命にあると聞くことが多く、古文書の保管や管理は大きな課題であると認識している。

しかしながら、そうした古文書を解読する人材の高齢化が進んでいるという。その状況を打開すべく、古文書を扱うおもしろさに焦点をあて、本協議会が開催された。古文書を扱う場に、私のような素人が気軽に参加できる場がもっと増えると、新たな展開も期待されよう。

■引用文献

内山節（2006）無事な「場所」についての想像力 .『「創造的である」ということ（上）―農の営みから―』. 農山漁村文化協会発行 . pp. 150-180.

内山節(2010)「教育」の再検討 .『地域の作法から』『「創造的である」ということ（下）―農の営みから―』. 農山漁村文化協会発行 . pp. 217-246.

安永悟 .（2015）協同による活動性の高い授業づくり―深い変化成長を実感できる授業をめざして― .「ディープアクティブラーニング―大学授業を深化させるために―」松下佳代編 . 勁草書房 .pp. 113-139.

全体討論

司会　奥村弘・前田結城

奥村弘（司会）　ここからの司会は、奥村と前田で進めさせていただきます。いくつか質問ペーパーが出ていますので、これらについてパネラーの方に答えていただくことから始めていきたいと思います。まず、具体的な活動を行うにあたって困っていることに関する質問がありました。白谷さんからですが、地域の歴史遺産を掘り起こしていく作業に対して、「必要がない」や「意味がない」といったマイナスの声とか圧力はないのでしょうか、また、あった場合はどのように対処されていますでしょうか、という質問が出されています。恐らく何か具体的に困っていることがあると思われますので、若干の発言をいただいた後に答えていただきたいと思います。

白谷朋世（芦屋市教育委員会）　失礼します。私は仕事の関係で行政の側に身を置いていますが、いわゆる近現代になって発展した地域の場合、古い時代のことはいらないという意見が行政の中でよく言われます。さらに、地域の方もどちらかというと地元ではなく外から入ってこられた方が多いので、そこが農村だった時代の話とかをしますと、「いらないことを聞かされた」とか「おもしろくない」といったことを言われることもあります。もちろん、「知らなかったことを知れておもしろかった」ということをおっしゃる方もたくさんいらっしゃるのですけれども、古い時代のことに対して興味の薄い方の中には、史料を残すとか活字化するとか伝えていくことは不要である、といったかなりマイナスなご意見をお持ちの方もいます。そういう方へどのように答えたらよいのかというのは、いつも自分の中での問いかけになっているのですが、明確な答えは見いだせていません。ですので、もし似たような経験をされた方がいらっしゃったらご意見を聞かせていただければと思い質問させていただきました。

奥村　なかなか難しい問題です。古い時代ということなので、まずは坂江さんにお答えいただきたいと思います。

坂江渉（兵庫県立博物館ひょうご歴史研究室）　難しい問題ですね。例えば、加西市の野上町での経験ですが、普段は気に留めることもないような小さな道が、実は江戸時代の絵図からみてみると非常に重要な道であった、というような話をした際には、「子供たちにも教えなきゃ」といった風に興味を持っていただくことができました。ただ、私自身はあまりマイナスな意見をぶつけられたことはないので、うまくお答えすることができません。むしろ行政の立場にいる岸本さんから何かありませんでしょうか。

奥村　岸本さんお願いします。

岸本道昭（たつの市教育委員会）　行政にいますと、市民の方はいろんなことをおっしゃいます。はなから歴史や文化財に全く興味を持っておられない方もたくさんいます。だけど、だからといってその人たちと向きあわなくてもいいというわけにはいかない。しつこく、ねばり強く歴史や文化の大切さや未来へ伝える使命を説くしかないですよね。我々は歴史的な思考とは切っても切り離せないはずですよ。だから、ねばり強く説明していくしかないと思います。

奥村　ありがとうございます。あわせて前田さんからもお願いします。

前田結城（司会）　実体験で何度もあるのですが、自治会に文書があるから前田さん来て下さいとなる。みんなで集まって整理をしよう、歴史を勉強しようという話なわけです。ところが、それで現地に行きますと自治会長さんと副自治会長さんの二人だけがいて申し訳なさそうに私に言うんです。「うちの地区には歴史に興味を持つもんがおらんのでねぇ」と。やはり歴史というと中学や高校でやらされた「暗記物の歴史」というイメージがあるのか、「何か難しいことをやらされるのではないか」というふうに思われてしまっているのでしょう。今は氷上の自治会に行っていますが、自治会の方には最初は難しく思われないように、

「おもしろいものが見つかったから、みんなで集まりましょう」といった取っ掛かりを設けた上で活動しています。そこから古文書を読んでみようといったことに拡がっていく。そうして気づいたら歴史を勉強している。これは、今日報告された小原さんのお話にもあったことだと思います。

奥村　ありがとうございます。川口さんからもしご発言があればお願いします。

川口利和（丹波古文書倶楽部代表者）　地元の自治会で地域担当サークルという会があり、そこの会員になっています。自治会の会合の時に小字の名前が飛び交っているとついていけなくなり困る時があるんです。小字のことを知っている一定年齢以上の人はいいとしても、そうでない我々にはついていけない。それで、地域のことをもっと知りたいなというのがきっかけとなり入会しました。実際に動いてみると、地域を開拓した人のお墓とか、あるいは、今はないけれども整備される前はこういう道があったのだとか、そういう所に小字名がぽつんと出てきたりとか、そういうのがあって少しずつ地域のことが分かってきております。地域の古地図があるものですから、それを現代語訳するなりして自治会に配ってはどうかという構想があります。それと関連して地域のことを知らないそういう人たちに知ってもらうための活動、「知らないから知ろうよ」をきっかけに動いています。ですから、上から目線ではなく分からないことをもう少し勉強しようということをきっかけに動いている最中です。どういう結果になるかは分からないですけれど、今はそんな状況であります。

奥村　ありがとうございます。重要な課題だと思います。今のことで他になにか会場のみなさんからご意見がある方がおられましたら手をあげていただけますでしょうか。いかがでしょうか。

鳴瀬美智子（篠山市立中央図書館地域資料整理サポーター）　私は大阪に40年以上住んで、篠山に行ってからまだ日が浅いんですけれども、篠山に行って初めて古文書の存在を知って歴史的な宝物がいっぱいあることを知ったんですね。それまでは働いていましたし、大阪も神戸も歴史的に古いものは持っていると思うんですけれども、そこに興味を持つだけの時間がなかったんですね。でも本当に自分達が暮らす場所、これからの子や孫がそこで暮らしていくことをちゃんと視点に持てば、地域を知るとか先人がどういう暮らしをしていたとか、今に至るいろんな制度も明治維新以降のいろんなことも、それ以前の歴史があって人々の営みやら工夫があって今につながっていることを古文書の整理作業の中であらためて知る機会がたくさんありました。だから、遅ればせなんですけれどもそういった資料をこれから紐解いて残していくことで自分達の子や孫に日本が今まで国中でいろんなことをやってきたことが今の現在につながっていることを知らせていきたいと思っています。そのことが地域を知って愛していくこと、そして発展させる力になるんじゃないかなと私が思っています。だから地域的にそういう考えを持つ方もいらっしゃるかも分からないけど、やっぱり時間をかけてゆっくりそのことを話あっていくことがまず第一歩じゃないかなと思います。

奥村　ありがとうございました。この問題はこの場で解決するようなものではないでしょう。ただ、先ほど前田さんから発言がありましたけれども、歴史はどうしても高校までは「覚えなきゃいけないもの」というのがありまして、私はよく工学部に阪神・淡路大震災の歴史を語りにいくんですけれども、「日本史が好きな人」と挙手を求めても、シーンとしてしまいます(笑)。ものすごくアウェイ感があります。どうしてもいやいや覚えたという記憶があって、そのイメージがつきまとうということがありまして、それでそのまま大人になりますと「なんなの歴史は？」となりかねない。先ほど言われましたように自分の場に即して自分や地域を考え直したりするのが大事かなと思いましたし、それからもう一つは、先ほどの近代で発展した町だからというのがあったりしますと、これも観光とかで押し出すところだけが歴史になるということが結構あって、その他のことはやらなくていいと思われる方がおられるんですが、決して

そうではない。巨大な国宝の城があるから他はどうでもいいというわけにはいかないわけで、そういうことなどがやっぱり観光とかの関係では起こりやすいことになります。それから、歴史文化に関する何らかの部分を前面に押し出すと、後景に退いた部分にはなかなか手が回らないということになってきたりするんですね。でも、そういう点では、先ほどもありましたけれども、現場で生活している人間に光を当てつつ地域の歴史を考えていきますと、もっと豊かな歴史像が出てきますし、そういうリアルで身近な歴史と観光で使われている大きな歴史といいますか、有名な歴史とが実は関わり合っていることが分かってきます。また、そうした地域の人びとにとってリアルな歴史も同時に考えていくことが必要だということも粘り強く言っていくしかないと、改めて思います。このことは後でまた議論ができればと思います。つぎにご質問の中で神戸新聞社の大国さんから「図書館が館外の地域資料までに視野を広げている話がありましたが、地元の歴史関係の資料館との棲み分けとか調整とかはどうしていますか」という質問がありましたが、これも大国さんが日常的に考えていることと関係しているような気がしますので、もう少し具体的な話をしていただいてみなさんと議論していきたいと思います。大国さんよろしくお願いいたします。

大国正美（神戸新聞社）　おっしゃっていただいたことは非常に根の深い問題でして、図書館が早くできて、その後に資料館とか文書館ができてくるという、歴史的な流れでいうとそういうケースが多くて、かつては古文書を扱う施設がなく、図書館等に保存されて図書館がかなり積極的に文書の整理・保存をやるところが、例えば東京の町田市にあります。ただその後、資料館・文書館等がたくさん出てくる中で、そういうものを一体どこで扱うのかという議論が生まれてくると思います。文書館そのものは公文書に限定した動きがある中で、民間にある古文書等を視野に入れることについてはいろんな否定的な意見もあります。そういうことについて篠山市にも歴史を扱う施設がありますので、そういったものとの役割分担みたいなものをどんなふうに考えていったらいいのかなと思っております。もし、そういうことについて何かはっきりした議論等が行政の中にあるのならば教えていただきたいなという意味です。

奥村　ありがとうございます。まずは実態として井上さんから分かる限りのことで答えていただいた上でみなさんと議論していきたいと思います。

井上勝盛（篠山市立中央図書館）　棲み分けの話というのは、これまでも聞いております。青山歴史村という美術館があるのですが、篠山藩青山家の文書関係を一式保存・保管しています。これは所管としては教育委員会の社会文化財課で担当して、その部署でしっかりと適切に管理しているというのが現在の組織的な対応になります。図書館も同じく教育委員会に属しているわけですけれど、それ以外の地域資料の収集・保管というものをしているのが組織的な現状の対応になっています。したがって、よくあっちで管理してまたこっちの部署で管理してというのを聞いて、もう少し包括的・一括的な集中センターみたいなものが機能として持てないのかという話も出てくるわけですけれども、一応いまの現状では各部署がそれぞれの立場で適切に管理をしているというのでこの場ではご理解いただきたいと思います。

奥村　ありがとうございました。前田さん、これについて篠山との関係で何かご意見ございませんか。

前田　井上さんは非常に温かいといいますか、会が終わった後に記念写真を撮ったりするのもそうですし、わざわざ「第何回資料整理サポーター」の横断幕までご自身で作られて、勤務時間外で色々やられていると思うのですが、今日お越しになられている松下正和さんなんかもよく「史料は人につく」とおっしゃいますけれども、「人次第」みたいな部分が半ばあって、そういったことで井上さんがいるおかげで続いているという部分もあります。これからもおつきあいいただければというふうに思います。

岩瀬秀子（篠山市立中央図書館地域資料整理サ

ポーター） いまのことに関してお聞きしたいと思います。地域資料整理サポーターとして３年目になりますが、ちょっと疑問に思っていまして、どうしたらいいのかなと思っていることをお聞きしたいと思います。どういうことかと言いますと、古文書とか地域資料と一口に言いますけど、古文書っていうのは何とかストーンとか石の遺跡じゃなくて、たしかに紙に墨で書かれたものを扱うというか、実物はありますけども、私が関心があるのは中に書かれている記録というか情報というか内容に大変興味があります。それで資料館という場合は、実物というか実体というか、そういった物をどんなふうに湿度とか管理して、正倉院みたいに残そうと思われるのか。史料のなかに書かれている情報さえ残れば、場合によっては紙自体は後代無くなってしまっても構わないというくらいに思います。ただし、その中身の情報は大変貴重なものであるので、いま私達が取り組んでおりますのは自主活動としてですが、目録作成を教えていただいていて、それをやりとげると同時にその翻刻文が書かれているのをパソコンのデータ化してそれで後世にも残したいと思うんです。古文書の場合、そこに記された内容が大変大事なんではないか。石像物や他の遺物とは違ってそれは古文書独自の値打ちなんではないかと思うんです。それについて残していくのであれば、図書館のほうが有効ではないかと思います。ただ研究家だけとか歴史愛好家だけがその古文書を読めたりするのじゃなくて、中に書いてある文章を現代文に直してそれを伝えていくことが私は一つの大事なことなんではないかと思うんですが、先生方教えていただきたいと思います。

奥村 これについては古文書を解読するという活動をずっと続けてきたセンターの木村研究員から発言していただきたいと思います。

木村修二（神戸大学大学院人文学研究科学術研究員） 僕自身はどちらかというと利用者として関わる機会も多いのですが、そういう視点からみて博物館が所蔵する古文書、あるいは図書館が所蔵する古文書、あるいはアーカイブというものが保管されるべき理想的な施設としてのいわゆる文書館という施設。そういったものを念頭に置くと、やっぱり文書の保存に特化した文書館が最もふさわしいというのは分かるわけですが、箱モノをいくつも一つの自治体の中で造れない事情がある中で、だいたい図書館はある、それに対して歴史民俗資料館ようなものが存在する自治体であれば、それぞれの館が持つ施設とか保管設備とかに則ってその時その時に選択されるのかなと思います。資料館という所に有効な保存設備があるのであればそちらに置かれるかもしれませんし、あるいはただでさえ図書というものがたまる中で扱いにくい古文書を置くことができないとかそういった事情があったりすると必然的に資料館に優先的に置いていくという機会があるかもしれないということですよね。だから、そんな中でどちらが理想かとはなかなか判断しにくいわけですけれども、博物館というのは本質的に博物館法といった規定からいきますと、公開はするけれどもその展示を通しての公開という形で通してしまいがちなところもあります。もちろん長野県などには、いわゆる文書館施設を兼ねたような博物館も存在するわけで、やりようによっては色々工夫もできると思うんですけれども、しかしながら、「紙だから図書館」という発想には必ずしも結び付くものではなくて、やはりそれぞれの自治体によって、古文書というものは他の紙媒体一般とは異なる、特殊な扱いを受けるものになったりします。私自身は、古文書は他の印刷物とは違ってモノそれ自体が重要だと思います。先ほど前田さんの口から名前が出ましたが、松下正和さんなんかはよく「古文書っていうものはどこにでもある。どの村にも大概ある。だけど、それはそこにしかない。」と言われます。古文書とはそういうものでもある。だからそういう意味で、古文書はそれ自体モノとしての大事なのか、あるいはそこに書かれた文字情報こそが大事なのか、どちらか一方っていうのではなく、われわれとしてはそこのところを勘案しつつ自治体なりの現実に応じて、どこが最良なのかということを選択していくしかないのかなと思った

りしております。

奥村　かなり呻吟しながら答えていただきましたが、会場の方でこれについて意見をお持ちの方がおられましたら、手をあげていただけませんでしょうか。

大槻守（香寺町史研究室）　私どもの資料保存に共通する課題なのですが、自治体史の編纂が終わると資料をどこで保存するのかという問題があります。私ども自身は町史の編纂が終わりまして合併しますと、もとの自治体がなくなったという事情もございますけれども、どこでどういう形で保存するのが一番よいのかということを、現実的な問題として抱えております。私どもは姫路市と合併しましたので姫路市で保存をきちんとして欲しいということで、ただし私どもの希望としては図書館に置いてもらえないかということを要望しております。といいますのは、利用する立場から言えば、だいたい図書館というのは本館と分館があって、閲覧に便利ですね。近い存在だということで。資料館的なもの、姫路市にはそれができておりませんからなんともいえませんが、図書館であれば地域の人も一定利用できるということになるのです。となると、図書館の場合、県下の図書館がどうなのか、今、篠山の古文書も受け入れているということですが、一般的にどうなのか私はよく分からないので先生方に教えていただきたいのですが、私どもは図書館に入れました。図書館は活字で書かれた図書だけしか扱わない、くずし字で書いた古文書は図書館になじまない、したがって受け入れはしないということを言われている。しかし一般には郷土資料を図書館が集めるのは当然ではないかということ私などは言うんですけども、たしかに図書館が扱えないということはあろうかと思いますね。したがってそれは私どもも困っているというのが現状なんですね。その点で皆さんからご意見ありましたらお聞かせいたければありがたいと思っています。姫路市には文書館はまだありません。設置について検討していると行政はいいますが、いつになるのか分からないと思います。造らないとは言わない、しかしいつ造るか分からない。したがって今のところ収蔵する場所はないというのが現状ですが、まぁ行き先に困っております。

奥村　ありがとうございました。他にご意見はありませんか。

小山直樹（生野古文書教室）　私はただ古文書に関心があって、地元の旧家から出ている銀山関係の文書を勉強しているだけの初心者という立場のものですが、いまの話を聞いておりまして、みなさんが気にしておられることは、私のような者でも感じております。一ついま小さな160軒ほどの区長をしておりまして、その区でも手をつけていない区有文書があります。それからご存知かどうか分かりませんが4町が1つの市になりましたので、多分それぞれがいわゆる町史（誌）をもっておりました。ですからその時の参考資料があるはずですね。いま大槻先生もお話になられたように、旧町史（誌）編纂時に使われた史料がどのように管理されているのか気になっています。現存の有無自体が分かりにくくなっていることも含めてですが。そういう点でやはり区有文書とかいま申し上げた旧町史（誌）の編纂資料とかですね、そういうものをきちんと管理するということはしていただきたいな、していかないといけないのではないかなと。それから国立公文書館の季報を読んでましたら、国立公文書館の館長さんの座談会の中の言葉で、「公文書」とはいわゆる行政だけじゃなくて一般の民間にあるような文書も含めて公文書という定義をされているようですね。ですから全ての文書ということになると思うのですが。それが年中、国立公文書館にも持ち込まれるのだが、あまりにもスタッフが少なくて国自体がこれからの課題だと書いておられました。古文書の保存・管理というかそういうことについては国自体これからだということを書いておられました。ですからやはり今地方からというんでしたら、本当にできる自治体とかそういう所がもっと進んだことをやれば、やっぱり地方から変わっていくことになるのかなと。もっともこれは予算を要することであり、これはやはり政治的なものにもな

るんですけれども…。いまそんなことを考えています。

前田　では逆にここで成功事例をちょっと聞いてみたいと思います。棚原からお越しいただいている上田さん、どのような経緯で資料室を公民館に設けることになったのでしょうか。

上田脩（棚原自治会パワーアップ事業推進委員会）　われわれは古文書の情報も、古文書というモノそれ自体も、どちらも重要だと考えます。ただし文化価値としてはやっぱり唯一無二のもの。これしかないと思います。これはとにかく、いつになっても大事に残していく。古文書は資料室の保管庫で大切に保管し、頻繁にさわるようなことはしない。古文書にある情報を利用するのであれば、全てデジカメで写真を撮っておりますから、データの方を使う。ですが、最も文化な価値があるのはそうしたデータではない。あくまでも、百年、二百年、三百年前に書かれた現物。これぞやはり文化価値がある。

前田　ありがとうございました。では、尼崎にお勤めの河野さんお願いします。

河野未央（尼崎市立地域研究史料館）　これまで議論に出てました“資料館”に勤めておりまして、基礎自治体でこうした館をもっているところはまだまだ兵庫県下では少ないようです。資料館と申しますのは図書館と違いまして、まさしく古文書を初めとする地域の資料を収集・保存しておりまして、市民の方のニーズに応じて、どこそこの村の古文書がみたいとか、この地域の昭和何年代の写真がみたいとか、そういうニーズに応じて、来館した方にそれをお見せする。そのような利用をしていただくことを望んでおります。ですから、資料館の独自性というのは、先ほどから皆様がおっしゃいていただいているような地域の一点ものの、そこにしかない資料というのを大事に保管させていただいている。ただここから個人的な意見になりますけれども、もちろん資料館の独自性というもので、そういう資料館が各自治体にできればいいなとは思うのですけれども、ただそういう役割を図書館が担っても、博物館が担っていても個人的には構わないと思っています。一番の問題はそうしたものを見たいとか、そうしたらものから学びたいというニーズをどこまで受けて提供できるのかということが一つかなと思っています。尼崎市でどこまでできているのかと言われると非常にしんどいのですが、博物館と図書館と連携をしてですね、どこに文書が保有されていてもどこかの門を叩けばそこの情報が出てくるっていうようなことになれば、学びの場としてお手伝いができるんだろうなと思っています。尼崎市の資料館自体は、また縦割り行政の話になって恐縮なんですが、総務局に属していまして教育委員会とは違うところなんですね。だから教育委員会と局との連携となるとしんどいところがあるのが事実なのですが、できるだけそういう壁をなくしていく。もう一つは地域で古文書を守りたいと思われていたら地域で保管されていてもぜんぜん構わないと思うんですね。ただその文書自体を守り伝えたいという方々のフォローアップをどんどんしていなかないといけないと思います。二つめに、どこまで目配りできてどこまで支えられるかというのが課題だと思います。偉そうに語っておりますが、地域へのフォローというのは資料館まだまだですし、むしろ篠山の事例とかで、古文書が学びたいといって自らサポーターとして入っていかれたということを資料館の側でも聞いて、資料館でももちろん古文書整理はしているのですけれども、そういう自発的な動きというのがまだなかなか進まないところもございますので、また色々教えていただけたらなと思います。

奥村　どうもありがとうございました。このことも終わりがない話になっていくと思うのですが、なによりも一つは県下の全体から考えてみますと、実は尼崎のように地域史料館という形で公文書館的な機能を持っているところは神戸市にも小さいながら存在しますが、県下にはほとんどそれ以外は存在しないという現実があります。もう一つは基礎自治体の博物館、専任の学芸員が置かれている博物館も非常に小さいという現実が存在しております。そういう点で市民の方が学んだり、

発信していくということでいうと、もっともある意味充実した機能をもっているのは全体としてみれば図書館であるというのは現実があります。最近、公立博物館の協議会などで全国の博物館の実践例を聞くことがありますけれども、図書館の進んでいる方向の中の一つは「地域の知のセンター」として学び・発信の拠点となっていくこと、それにより図書館機能というものをより充実させていくという方向で動いている。そのほとんどの場合は、今までの図書の貸し出しというイメージではない図書館の機能、「地域の知の拠点」としての図書館の機能というものをアピールする方向で動いておりますので、ある意味では図書館と文書館の間の垣根は、市民から見た場合はそれほど高くない。行政の内部・機構からみればかなり遠いところにいるのですが、本当に市民が使いやすい発信拠点としての場所はどうなっていくのかということは、これじゃなきゃならないという議論ではなく、いい事例を積み上げながら相互に協力していくということが大事かなと思います。なによりも先ほどもありましたけれども、全体的に文化部門が貧しいので何とかそういうところを強めていくこと自体が最も大事だと思っています。さらに地域資料を地域の中でしっかりと残していくことも大事なのですが、これはまだまだ、図書館も博物館も充分ではありません。

では次の質問。これもなかなか大変な話ですが、神戸市文書館の木原さんから地域における活動の担い手の高齢化や減少の問題が指摘されています。担い手の高齢化という問題は、歴史文化部門のみならず、今後広範に現れてくるだろう思いますが、この点については篠山の事例を踏まえて、清野さんから一言お願いいたします。

清野未恵子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科特命助教）　いま活動の実践者の高齢化というお話がありましたけれども、もし岸本さんがおっしゃるように人間に歴史的思考が存在するのだ、これがあっていま私達が生活しているのだと考えるならば、若い人に古文書の中身に触れる機会があると恐らくもっとおもしろさにひかれていくのではないかと思われるんです。というのも、私は全く専門は違いますけれども、昨年の古文書合宿の際、整理した古文書のなかに「篠山藩主が福住駅で休憩したとき、おもてなしに素麺と鯖寿司が出された」との記載があると説明を受けて、「そんなこと書いてあるんですか。おもしろいですね。じゃあつぎ篠山にお客様が来られた時にそういう対応をしたい」と思ったわけです。で、実は地域の担い手として地域を活性化しないといけないと思っている若者はたくさんいます。その時に歴史というものは何よりの資源です。ですので、歴史を活用したい時にそれができるようにしていただく役割が、恐らく地域資料整理サポーターの皆さんにあるんだろうと思うわけです。もう一つ、違うことになってしまうのですが、古文書の保管の問題を伺った際に、「そもそも何故地元で保管してきたのか？蔵で庄屋さんが地域の資料を保管してきたというが、そもそも何故地域にそういう大事な資料が保管される体制が存在したのか？」などと疑問を持ちました。そうして考えると、いま地域が地方創生とか地域創生でやっていかなきゃいかんという時に、そもそも地域の歴史を守るという取り組みを、若い人達と構築するということをしなければ、いまの時代の歴史でさえ残っていかないと思うのですね。なので、ここにいる方々の役割ってすごく大きくて、恐らくおもしろおかしく語れる方がたくさんいらっしゃると思います。ですから、古文書のなかにある情報をもっといろんな場面でふれる機会というのを作っていただけたら、少しは高齢化の問題は解決するんじゃないかなと思います。

奥村　ありがとうございます。若い世代との格闘というのはいろいろと現場ではたくさん知っていらっしゃることもあると思うのですが、岸本さん、その点で何か子供達との関係も含めていろんな方法をとられてきたと思いますが、いかがでしょうか。

岸本　そうですね、酷な言い方ですけれども、私は地域のお年寄りよりもやっぱり若い世代にいかに歴史とか文化のおもしろさを伝えるかというこ

とをもっとやらないといけないと思っています。ですから例えば小学生の子供達、それから中学生、まぁ高校生くらいになるとまた違うんですけれども、小さい時から地域の歴史とか文化財とかいろんなものにあらゆる機会をつかまえてふれされて、語りかけておもしろさを体験させて…ということを、本当に微々たる活動ではありますけれども、心がけるようにはしております。それぐらいしか次の世代に歴史や文化を伝えていく方法がないんですね。これから日本は人口減少社会を迎えて縮小社会になります。で、歴史とか文化とかいっていられない様々な問題が、今後50年くらいに噴出してくると思っています。それに対応するにはどうするかというと、もうとにかく歯を食いしばって、細々とでも次の世代に我々が伝えようとしていることをいかに手渡していけるか、それしかないんだ、というよりもその一点のみで頑張っているというそんな状況でしょうかね。

奥村　ありがとうございます。様々な世代への対応というのはいろんな所で進められていますが、加西市の萩原さん、今年度もいろいろな企画を出されましたが、そうしたことも含めて、もしご感想やご意見等ありましたら出していただけませんでしょうか。

萩原康仁（加西市教育委員会生涯学習課）　ちょっとテーマとはずれるのですが、私の所も文書等の絡みでどのように伝えていくかということで、いまのところは若い世代が当然入っていかないといけないとは思うんですが、そこは障壁が高くて入れないというところなんで、いまの社会のビジネスの枠組みからみていくと、やっぱり団塊の世代をどうやって取り込んでいくか。時間とお金に少し余裕のある団塊の世代の方々を取り込んでいきたいという意見は課内で当然出ております。ただ、加西市のように内陸部でありますと、都市部の場合は団塊の世代といいますと定年されて時間とお金に多少の余裕があるという方がいらっしゃるのですが、私どもの地域になってきますと、定年前40代後半から50代にかけての大半の方は、趣味が米作りに移ってしまいまして、仕事をやめられたら完全に専業農家化されてしまいまして、文化とか歴史とかにさらに興味がなくなってしまうという状況がございます。そういう状況があるので歴史とか文化とかを「こういうことをしますよ」というので集めていき、そうして担い手を作っていくというのが非常に難しい状態になっております。今年度私どもの市には青野ヶ原の捕虜収容所がありまして、そこが100周年記念ということでいろいろ事業をさせていただきました。その時は講演会しますよ、資料展示しますよ、といってもだいたい来る人決まってますし、だいたい来る人数も把握できますので、だいたいこれくらいの人数が目標で、これくらい来て成功やな、以上、で終わってしまうことがあります。今回は全然関心のない人に無理矢理歴史を吹き込んでやろうということでやっていきまして、最初は公民館活動でおばさま方の料理教室に無理矢理ドイツ料理をしてくれといって、一緒にドイツ料理を作りながら、「こういうドイツの兵が捕虜で来ましてね」いう話を奥様方としながら、ちょっとでも覚えて帰ってもらおうという企画を開催しました。また秋には、収容所でサッカー大会を姫路師範学校とやったという史実があるので、それ再現しようということで、神戸大の学生の方にもご協力いただき、学生のチームを作りました。外国人も呼んできまして市内・市外の外国人そして市内近辺のサッカーが好きな連中を無理矢理集めて、まず話を聞け、ということからスタートして、まぁ無理矢理ですけど全然関係ないところから少しづつ種を蒔きながら一歩でも二歩でも歴史に興味をもってもらえたらいいなという事業を展開させております。ちょっと強引な手法ですが、無理矢理でもやっていかないかんなと最近は思っております。

坂江　僕は高齢者の人達を主体にやっていくのでも充分いいと思うのですね。ただ、若い人が来ないからどうしたらいいでしょうとは、よく言われます。そこで、若い世代といっても対象年齢をぐっと下げて、小学生を動員してみたのです。すると、低学年になればなるほどそのお母さんが一緒にやってきて、なんらかのイベントをするというこ

とになりました。これは小野市立考古館のやり方ですが、僕はなるほどなと思いまして、若い20代前後の学生ではなくて、ずっと若い世代にターゲットして、そして3世代でいろんなことをやっていく。これ尼崎の富松でもよくやられている手で、鎧兜祭りなどといって実は親御さんをターゲットにしていきました。これも一つのやり方です。もう一つ今日の清野さんの報告で非常に興味深いと思った非文字の学問の話ですが、学生が現地の農業実習に行って非常におもしろいと。楽しみながら来ているというのがびっくりしました。これは学部の正規の実習として取り組まれているらしく、文学部でも古文書合宿は設けられていますが、それ以外に正規の授業として、歴史実習みたいなものが、それこそ COC+ とかで行えたら…。僕はフィールドワーク好きですから、特にいろんな道歩いて、『ブラタモリ』じゃないですけども地形の変化とか、そのような講習やったらなんぼでも（やります）。非常勤先で歩くの大好きですわ。よく上町台地が坂の町であることを実感してもらうために、学生を天王寺あたりに連れていきますと、「大阪の知らなかったことを知りました」などと言われます。自然環境めぐりというかフィールドワークもけっこう歴史好きにつながるんじゃないかな、と。大学の授業を通じて若い人を取り込むというのは重要かなと思います。

奥村　ありがとうございました。まだまだ議論は尽きないところですけども、時間がだいぶたってきていますので、この他皆さん会場の方から今回のお話を聞いて質問とかご意見がありましたら出していただければと思います。

前田　第一部で報告いただいた槻橋先生、何かご意見はありますか。

槻橋修（神戸大学大学院工学研究科准教授）　共通する部分も多くて、先ほど『ブラタモリ』の話がありましたけれども、いま私なんかも実際に富山県の氷見市で公園を作るという、市民の皆さんワークショップで公園を作るという仕事をしてまして、その中で私達のほうでアイデアとして出したのは、歴史家、都市史とか地域史をやっている専門家に一緒にデザインチームに入ってもらって、地域史から一緒にやる。それで町の中の公園はどうあったらいいかっていうことを、もちろん歴史だけでやるわけじゃないですけど、実際に現地で遊んでみて、ここにはこういう施設、トイレはここにあったらいいねとかそういうことをやりながらも、それだけじゃなくて一緒に公園の周りの町を歩いてみてその町の歴史をいうものを踏まえた上でこの公園をどうするか、ということを一緒にやります。そこで感じるのは、非常に皆さん歴史ということに関心が高い。ただ博物館がやっている歴史ウォーク、これもまぁファンの方は来られるんだけど、多分今日話題になっていた「歴史っていうものはいらないんじゃないか」的な議論・意見が出てくるのは、恐らく、「ブラタモリみたいのだったらいいよ」、というのがあるんじゃないか。要は入り口。提供する側の理屈で与えようとしてもやっぱりなかなかそれは受け手側が分からないので興味がもてない、ということがあるのかなぁと最近感じます。だから受け手側、僕らは user experience と最近よくいいますけど、受け手側が欲しいと思っていることから入り口を作ってそこから入り込んでいく技みたいなことも考えていかなければならないのかなと最近思っています。清野さんの話は本当に被災地に学生とずっと通って、僕が出て行くよりも学生にまかせてしまったほうが、地元の人達が世代を超えて学生さんとすごく浸透していくんですね。なので、清野さんのやっているプロセスは全く共感するものがありまして、そういうところから地域に住まれている方は地域の一番の専門家で本来あるべきというかあるんだろうと。ただテクニックとか地域を俯瞰的にみて比較する等のことについては、やはり専門家の持ってる技術というものがあるでしょう。そういうものをすりあわしていくことなんだろうと。そのあたりが地域と大学の人達との関係を構築していって、一個一個時間をかけてやっていくしかない部分もあるんですけど、何かそういうところに学生さんが入ることで歴史に目覚めるとか、農業に目覚めるとか。でもジャン

ルじゃないですよね。歴史に目覚めながら農業に目覚めるみたいな。なので、そのプロセスを一緒に体験すると地域で農業やっている方もなにか歴史にちょっと興味をもったりとか、なにかそういうような巻き込むプロセスみたいなものがすごく重要なのかなぁと思いました。

奥村　ありがとうございました。時間もあまりないのですが、皆様いかがでしょうか。はい。

海部伸雄（淡路市文化財保護審議会）　高齢化の話、淡路市もそうなんですけれども、淡路市地方史研究会も私なんかはまだ若手だといわれるぐらいなんですが、先ほど岸本さんが若い世代をとおっしゃいまして、私小学校の教員をずっとやってましたもので、私も特にそういうふうに思います。私も大学の入試では日本史を選びませんで、世界史でとりました。日本史は嫌いでした。ただ大学行きましてから古文書・資料調査、そういうことをやりながらフィールドワークが本当におもしろいなと思いまして日本史に転向したわけですけども。で、淡路市は、県立考古博物館の縄文時代の展示の主要な部分を占めている佃遺跡があるところなんですね。佃遺跡のすぐそばに浦小学校という小学校があるんですが、縄文時代を教える時にで佃遺跡は全然関係ないんですね。やっぱり小学校、中学校もそうなんですが、自分が生まれ育ったその地域に歴史があることになかなか気づかない。歴史学習は教科書でするもんだと思ってますんで。そのあたりを、地域の歴史を子供達が学べるようにするために教材化する必要があるんですね。教材化するのは誰かといったら、やっぱり専門家といいますか教師が地域の歴史研究とか考古学研究の成果を教材化する必要がありますが、壁が非常に大きいんです。そのあたりを何か手立てをしないと、新しい世代を育てていくという問題は解決しないだろうと思います。それで佃遺跡の場合はですね、淡路市教育委員会社会教育課長が伊藤というのが専門ですので、職員研修に連れて行きまして、パワーポイントの中に佃遺跡のデータ・写真を全部入れるという研修をしてもらいました。そのデータを職員に渡して、いつでもいいから加工してと。加工して子供に使えるような教材にしてという意味でお願いしてたんです。すごく熱心な者がおりまして、3ヶ月くらいかかりましたが作ってきましたんで、それを私と伊藤のほうで手を加えまして、それもやはり一枚一枚こういうふうな説明をするとか流れも書いてですね、CD に焼きまして4月くらいにぜひ配りたいなと思っているんですけれども、かなりの部分で研究成果を調理して、本当に食べられるくらいのところまで料理して渡さないと、この教材化の問題は解決できないと思います。それを全ての地域でやるというのは難しいのですけれども、それぞれの地域の歴史の中で一つでもそういうのができたら、それをきっかけに教員のほうもこういう形でできるなというふうにいくんじゃないかなと。それは文字資料のほうです。もう一つは先ほど坂江さんがおっしゃいましたけど、歴史体験学習みたいものですね。例えば弥生式土器を作って、それでご飯を炊いてみるとか、そういう体験的な学習を組み合わせて展開していく、そんな地道な実践を積み上げていくことが今の状況を少しでも前に進めていくことになるんじゃないかなと思います。

奥村　ありがとうございました。もう時間がありませんので、最後に一つだけ。

小林誠司（兵庫県文化財保護指導委員）　私は仕事柄建築のほうにも関わっておりまして、ところどころの古いおうちにも入っております。そうしますと、土蔵・蔵に古文書がまだまだたくさんございます。文化財調査もしておりますので、拝見しておりますと、蔵が壊れた、高齢で人がいなくなった。そういったこともたくさんみております。特に去年は私の仕事を超えているような状況にでくわしまして。一つは高砂のK家、大変な状況でした。これを説明するには時間が要りますので端折りますが、それ以外にも民家でですね、古いおうちがありますが、そこから蔵が崩れてどうしよう、とか。普通の行政の方にいいますと、「そんなものは捨ててくれ」という言葉が真っ先に返ってきます。しかし、どうもこれはおかし

い。例えば映像のフィルムの缶。缶そのものありますが名前は入っていません。しかしおぼろげながら文字が書いてありますが、そこには関東大震災の記録がございました。これはサンテレビを通じてDVDにしていただきましたが、今まで公開されている京都大学やNHKが持っているもの以外に、未公開の関東大震災のフィルムがでておりました。そういったものが危うく残ったわけです。こういったものは行政の方がなかなか入れないところがございます。私は発見することがきっかけとなっておりますけれども、かなりいろんな意味で緊急にレスキューしなければいけないところがたくさんありました。私の場合は東播磨ですけれども、たくさんの方にどうしたらいいのか、助けてくれないかと考えております。明石のほうでは小学校の方々に3000部ずつ毎年こういった教育の雑誌も作っておりますけども、そういったもの以外にやはり文書資料館のようなものがやはり必要。行政の箱物を作ってくださいということではなくて、受け皿が必要ではないかなと思っています。この資料をどこに持っていたら助かるのか。Kさんの資料でもさらに大量にあったはずなんです。行政の資料室に保存するところはない、しかし研究したい。そんなニーズもたくさんあると思います。そういった受け皿的なものが緊急に必要ではないかというふうに感じておりました。それがなければ残したい資料も消えていくんではないかと感じております。たくさん課題と問題を抱えておりますが、また後ほど皆さんとお話できればなと思っております。

奥村　ありがとうございました。山下さん何かご意見ありますか？

山下史朗（兵庫県教育委員会事務局文化財課）
非常に厳しいご指摘をいただきましたけれども、文化財課にはいろいろとご相談がまいりました。小林さんからもいただいたりしております。緊急にこんなん出たけどなんとかならないか、ということはよくあるんですけれども、いまそういう文書類について、県の方で受け皿になるところが現実的にないんですね。図書館か県政資料館などもありますが、県の公文書だけということですし、歴史博物館ももちろんあるんですけども、こちらのほうも限界です。収蔵庫に置く場所もなくて、学校の空き教室を借りて資料をおいていることになっています。非常に広大な県域を持っていることもありまして、県で全部やっていくというのは難しい。そこで各市長になんとかしてほしいと思うのですけれども、先ほどの高砂のK邸の場合は、8000点にものぼる資料があるので市のほうで調査していくということにはなりました。これでちょっとご安心いただけたらと思うんですけども。それ以外にも各市で課題をいっぱい抱えられている。特にもともと91もあった市なり町なりが合併して41になっていますね。その少ない数の中で、それぞれ箱物とかスペース新しく作るというのは非常に難しくなっているという課題もあります。そういう中でこれからどんなふうに取り組んでいったらいいのかというのは我々県教委としても、重要な課題であると思っているところです。各地域の方々の取り組みというのは、市なり町なりの格差が大きいと思うのですね。いまここにお集まりのみなさんのところは熱心に取り組まれていて、問題意識もいっぱい持たれて、前向きに取り組まれている。ところがそうじゃないところも相当あります。で、いかにそれを県としても全体として底上げしてくかということを課題として思っているんですけども。話は飛びますが、昨年播磨国風土記1300年ということで、坂江さん中心になって取り組んでいただいたのですが、やはり地域の方々の関心はすごく高いんですね。なぜかというと、播磨地域の方々にとっては、ちょっとした記述であっても1300年前の記録が身近なところにあると。それは我々が思っている以上に関心が高かった。これをきっかけにもっともっと知ってみようと。そういうことも起こっておりニーズはすごくありますね。そういう受け皿になれるように、これから市・町に対して県が直接やることは難しいのでいかにこれを支援していけるかというところが課題だと思っています。

奥村　ありがとうございました。なかなか難しい

課題がいくつもあります。容れ物の問題は難しいのですが、同時に地方定住の問題とか古民家利用の問題であるとかということで、文化の領域だけでない地域の再生全体の中で我々が残していかなければならないものをどう残していくかということも考えていく、もしくはそういう中で残していく場所を拡大していくということも極めて重要ではないのかなと思っております。本日は行政の方も来られておりますけれども、ひとつの自治体だけが頑張るということは実際難しいのであって、文化財保存の担い手をいかに支え、保存の具体的方法をどうするのかという議論を、関係者が総力を挙げて進めないと、恐らく容れ物の問題を全県的に打開していくことは難しいのではないかと考えています。小林さんの取り組みのような、個別具体的な事例に即して、保管場所や保存方法、あるいはそれに携わる人の問題などについて情報を共有していきたいので、この後の懇親会でも議論していただければと思います。最後にパネラーの方から一言ずつお話しいただいて終わりとさせていただきます。

清野　神戸大学の拠点が篠山にある観点から一言述べさせていただきます。実はフィールドステーションにも緊急避難している古文書が置かれています。そういう意味でいうと、まだ読めないものである。しかし、蔵が壊れて保存状態が悪いというものを緊急的に置くということをさせていただいているのですが、先ほど歴博だったり図書館だったり地元の組織であったりで保管するという話がありましたが、大学が地域の拠点となって今後展開していくということがありうるならば、そこの施設でそういうものを、一時的にせよ、保管するということも考えられるかなと一つ思いました。それからフィールドワークについて槻橋先生からご指摘いただきましたけれども、道歩きというのを地元で農学部もやっておりますが、やはり地域の非文字の歴史もダダ漏れでして、文字として残っていない歴史がほぼ地域ではなくなりつつあると思うので、やはり聞き取りもあわせてやっていく必要があり、それを大学の授業でどうやっていくかというのが、大学の人間としての課題かな、と思います。

岸本　私がいま一番心配に思っているのは、最初のご挨拶にもありましたけれども、昨年の６月に文部科学大臣が妙な通知を出したのですね。まるで自己否定をするような通知を出している。これはですね、恐らくいま火消しにやっきになってちょっとあまり表に出て来ていませんけど、これは多分いまの日本政府の本音だろうと思うのですね。そうなると大学における文科系の教育というものがどんどんこれから先細りになる可能性がある。そうなった時に今日は「学」と「官」と「民」と、この３つの地域連携ということがだいぶ議論になりましたけれども、その研究者の部分、「学」の部分が非常に細ってしまう。そこが細ると今度「官」に就職する人がいなくなってしまう、っていうことが起こってくる。そうなった時にじゃあ本当に地域の歴史や文化はどうなっていくのか、誰が守っていくのか、誰が継承していくんだ、という根本的なところに非常に危機感を持っていますので、私はぜひ、兵庫県下の国立大学である神戸大学では、人文学研究科は絶対に先細りにならないように頑張っていただきたいなと、そういうことをお願いして最後の一言とさせていただきます。

坂江　前田さんから報告を頼まれた時に、歴史を学ぶ楽しさを自由に語ってくれといわれましたので、それを期待していたんですが、議論は資料の保管とか継承になり、それだけ皆さん関心が高いんだと思いました。やっぱりおもしろさと楽しさを感じながらやりたいということで、僕自身としては基本的には『ブラタモリ』路線ですね。フィールドワークは続けていきたいと思います。

木村　いま坂江さんの発言にもありましたが、今回の協議会はテーマとしてはおもしろさというのがあったはずなんですが、最後のほうは飛んでしまったような印象があります。今日の議論にありました担い手の問題、高齢化、地域にとっては切実な問題としてあるのかもしれませんが、一方で地域から若い人が絶対的にいなくなるという状況

もあるかもしれません。『LINK』6号に元山梨県立図書館の高橋修さんが、小学生向けの古文書読解プログラムみたいなものを作って実践されてきたという原稿を寄稿されています。なかなか挑戦的なアプローチですが、要は小学生のほうが、大人とか、いろんな知識・固定概念で固まった人よりは非常に頭が柔らかくて、パズル的にくずし字を読む能力があるのだと言われます。それを聞くとほんまかいなと思うのですが、実際、小学生とはいきませんでしたが、最近東灘区の住吉の資料館で、「トライやるウィーク」があった際、中学生を2人受け入れましたが、その中学生に僕は思いっきり古文書を読ませてみようと実験してみたところ、非常に食い付きがよかった。もちろん歴史にそもそも関心がある子だったんでしょうけど、目をキラキラさせて、50分くらいの予定にも関わらず、もっともっとやりたいということで、結局1時間30分くらいやったということもありました。古文書を読み解くポテンシャルという意味では、小学生とか中学生も秘めているのであり、彼らのような年代の人たちに「おもしろさ」を感じてもらえるようなアプローチの仕方を考えていけば、今後の期待も膨らんでいくのかな、と思います。

川口　36～7名という人間がいま丹波古文書クラブをやっております。小さな組織ですけれども地域の元気に少しでも発展に寄与できればなと思っております。

前田　地域連携に関わっていて最近すごく思いますのは、実学とは何ぞや、ということです。今日も改めて思いました。なんというか、われわれはリアルなものを見ていると思うんですね。テーマ説明の中で申しあげましたが、例えば「地域創生」という時に、「地域資源を活かしたまちづくり」なんていうことがよく言われているわけですよね。そのためには、リアルな「地域資源」というものに向き合う必要が出てきます。そうした時、地域とは、いきなり空から降ってやってくるものではないし、時間的に連続しているものでありますし、必ずそれは時間軸の中で地域を捉えるという思考過程を伴うと思うわけですね。実際、地域の皆さんと資料を読んでおりますとおじいちゃんの名前が出てきたとか、話でしか聞いたことがないひいじいちゃんの名前が出てきたとかで、わぁすごいみたいなことになっているわけですね。あんなにゴミくずでしかないと思っていた古文書から自分達のご先祖様の名前が出てくる。確かにこの地域を生きてきた人たちと自分とが、今まさに対話するわけですよね。これのどこがリアルじゃないと言えるんでしょうか。他方、今日は非文字の学問についてのお話がありましたが、どうしても歴史学をやっていると、文字に書かれた資料こそが実証的で、非文字的なものは非実証的だと切り捨てがちですけど、やはりその文字に現れない体系的な知というものがあって、それとふれることによって我々の歴史学もまた深まっていくということもありますし、非文字的なリアリティとの接触によって学問が深まっていくこともあると思います。それと、『LINK』7号の序文で木村さんが書かれていたことが私の中では非常に印象的で、『地方消滅』（増田寛也著、中公新書）という本がありますけども、あそこで述べられている「地方」や「消滅」のイメージはリアリティに欠けるということを言われている。で、同じ7号で市沢先生がたしか言われていたと思いますが、地方消滅論というのは何だかSFの世界のようであると。私も全く同感です。かと思えば最近『東京消滅』(増田寛也著、中公新書)という本が出てきました。このままいったら大まじめに「日本沈没」とかいう本が出てくるんじゃないかと思ったりするのですが…。果して本当に彼等はリアルなのだろうか。我々はリアルじゃないのだろうか、と思ったりするわけです。ですからリアルに地域を捉えるということを私たちは続けていきたいのですが、しかしそれをするためには人と人とがつながりあうということ、学びあうということを通してじゃないと、やはりリアルな知というものを継承していくことができないのではないかと思いますし、つながりあうことによって、学びあうことによって、過去から今につながる時間軸の中で人と人のつな

がりを知ることになるし、それがおもしろいし、またそれで学びあうことによって人と人とがつながって、またそれがおもしろい、ということになります。ひいてはそのような歴史文化をめぐる人びとのつながり、言い換えれば中間団体といったものをたくさん増やしていくことによって、リアルな歴史文化の多元性・多様性というものを地域の立場から主張するということが大事だと思いました。まぁちょっとかたい話になりましたけれども、なんしかこれからも頑張るということですね。今後もセンターの活動につきまして、ご支援いただけば幸いです。

奥村　楽しさを議論するつもりがかなり厳しい話ばかりしてしまいましたが、何よりも、楽しさがなければ我々は絶対にそれをしないので、そこがどういうものであるかというのをもう一度見直してみたいと思いました。先ほど清野さんから篠山フィールドステーションの事例紹介がありましたが、ここでは、農家さんのところに学生が100人くらいボランティアでいくような状態になっているんですね。僕は清野さんに、なんでそんなに学生が動員できるのか、ということを解明してくれとお願いをしているのですが…。文学部では学生100人が各地域に自発的に行くということには、なかなかならない。逆に市民の皆さんにたくさん来ていただけるという点では、人文学研究科のセンターは他の研究科のセンターにはない特色をもっております。それで皆さんと学生・大学院生とが一緒に学びあっていくスタイルが定着して、そこでの楽しさをうまく共有していければ、本当に、大学も楽しい大学になるんじゃないかなと思っております。今後も、歴史文化を歴史学の中のみではなく、幅広い分野の方々とともに捉えていけるような形をとっていきたいと考えております。「おもしろさ」に関する話はここではあまりできませんでしたので、このあとの懇親会の際にできればと思います。今日はどうもありがとうございました。

第４回地域史惣寄合 in 和泉への参加

地域史惣寄合は、主に近世史・近現代史究者の呼びかけによって、関心を同じくする者同士が集まり、地域史研究の実践と課題を語る場として、2008年、長野県飯田市で第１回の会がもたれたものである。その後、2010年の姫路市香寺町における第２回の会合も含め、ほぼ隔年で開催されてきたが、第４回の会合が、「地域における生活構築の歴史」(地域の全体史)を大枠のテーマとして、2015年７月19日、20日の２日間、大阪府和泉市の桃山学院大学、および大阪市立大学を会場として開催された。大阪市立大学の塚田孝氏による基調講演のほか、「関西周辺の自治体史における実践と課題」、「市民の取り組みと研究者との連携」、「まちづくりと歴史の商品化をめぐるせめぎあい」の３つのセッションと総合討論がおこなわれ、呼びかけ人の一人、奥村弘が報告をおこなったほか、教員、院生も参加して、討論に加わった。

（文責・古市晃）